

小笠原島紀事

壹 坤

和一九三號

鳴嶼總論

從文祿三年

至寬文十年八月

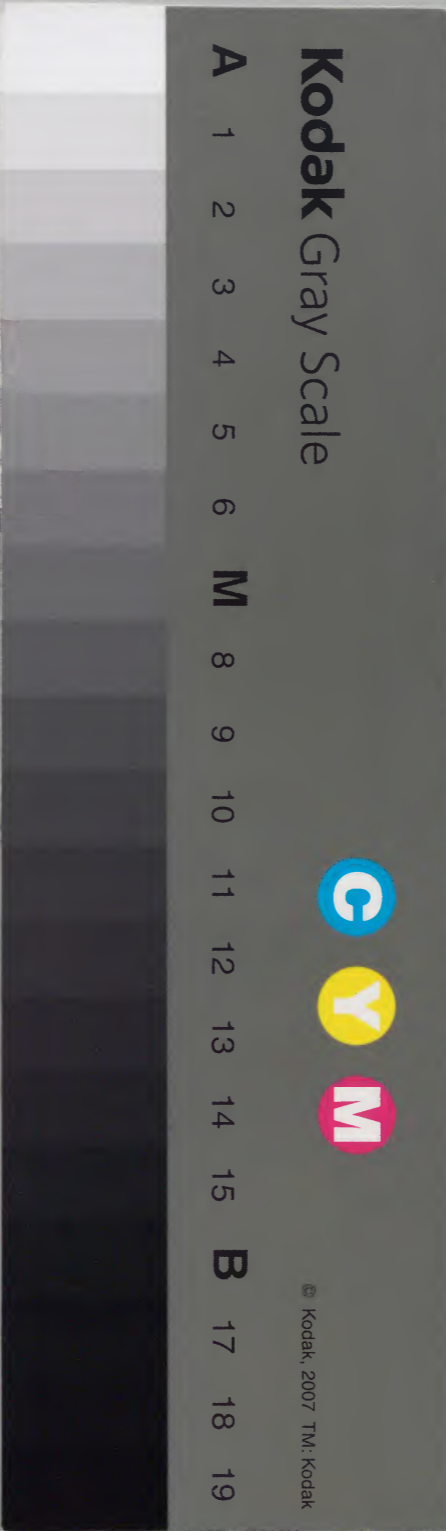
十日

第一卷
第一門
第一類

和 14165
33 (3)
271 69

| | | | |
|------|---|-------|---|
| 庫 | 文 | 閣 | 內 |
| 二七一函 | 三 | 一四一六五 | 和 |
| 三架 | 冊 | 號 | 書 |

| | |
|------|----------|
| 內閣文庫 | |
| 番號 | 和 14165 |
| 冊數 | 33 (3) |
| 函號 | 271 69 |



小笠原重忠

本

目録

一 小笠原重忠の墓所

二 小笠原重忠の墓所

三 小笠原重忠の墓所

四 小笠原重忠の墓所

五 小笠原重忠の墓所

小笠原島紀事卷之壹 坤

目錄

本編

○小笠原島全島總論 並 伊豆七島崖畧

○民部少輔小笠原貞頼創航

○貞頼傳系 後山

○其男民部長直畧傳 後山

○貞頼傳系考異

小笠原

○同畧系

○從五位小笠原忠忱家畧系

○寛文阿波淺川船漂流

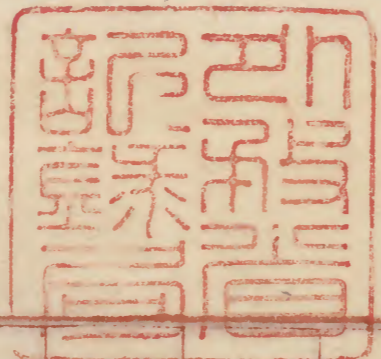
○天時也

○小笠原島全

本

自

小笠原島



小笠原島紀事卷之一 坤

鳥ノ啼東ノ海道伊豆國ノ南海八大島ノ巽小笠

原島ハ旧幕府徳川慶喜太政返上ヨリ以前ハ伊

豆相摸ノ縣令ガ管轄ニ附ス其島嶼東京ヲ距ル

事大約三百三十里 三十六町一里 東經百四十二度十五

分北緯二十七度十二分八大島ト其距離一百八

十里 三十六町一里ニ在リ羽倉用九カ南汎録天保戊戌

茶ニ開島南七八百里有無人島ト記シタルハ關

東道六町一里ノ里程ニヤ六町一里ノ八百里此

小笠原島

夕

町數四千八百町是ヲ三十六町一里ニ直シ百三
 十三里十二町トナレハ諸書ニ所云ノ百八十里
 ヲ以テ會計スル時ハ四十六里二十四町足ラサ
 ルニ似タリ其ヲ明治五年四月二十四日御布令
 經度一度ノ六十分一即陸里十六町九分七釐五
 毛ト定メテレシ海里一里ヲ以テ計算スレバ二
 百八十五里ニ當レリ然ルニ用九ガ所記ノ里程
 據レバ八丈ト小笠原島トノ距離殊ニ近ク聞
 ヲレ氏是ハ苟直ノ旅日記ニシテ深ク里程ヲ實
 シ記セシモノトモ覺エネバ姑ク仙臺人林友直
 カ三國通覽圖錄伊能勘解由ガ文化十二年測量
 御用調等ヲ始其餘諸書ニ所記ノ里程ニ據リテ
 本文ニ百八十里トハ記セシナリ叔東京ト小笠
 原島トノ距離三百三十里ト記セシモ前文ト同
 例ニテ南島要録ニ所記伊豆國附島々ヨリ江戸
 川口マテハ里數八丈百五十里ト見エ
 據

夕霧

ル然ルニ伊豆國七島全圖中ニ江戸ヨリハ丈マ
 テノ里程百二十里余トアルヲ以テ考フレバ其
 距離二十里余近シト雖モ本文ニ所記ノ百五十
 里トハ丈ヨリ小笠原島マテノ百八十里ヲ合セ
 算スレハ則三十六町一里ノ三百三十里ナリ其
 町數一萬千八百八十町ヲ今ノ海里ニ計算スレ
 バ六百九十九里ニ當レリ尚末ニ東京今ノ
 載スル本文里程ノ條ニ詳ナリ
 皇居ヨリノ方位南鑰ニ方レリ其島本屬大小ノ
 島嶼八十九群リ立チ其中ニテ殊ニ巨大ナルヲ
 父島ト号ケ本島トス本島ヨリ西ノ方間際海路
 十三里餘ヲ隔母島アリ其他兄島弟島東島西島

夕霧

野牛島南島 古名袋 港島 北島等ハ食父島ノ近傍四邊

ニ圍リ立テリ姉島妹島姪島平島向島等ハ母島

ノ四邊ニ在リ此餘父母兩島ヲ圍繞シ羣立ル島

嶼七十餘ハ食巖石ノ海中ニ尖出シタル小島ニ

テ介テ某島ト号クベキ程ノ地ナラネト大島 本名

信天縁又云信天翁船人ハ多ク藤九郎ト云ノ群ル巖嶼ヲ鳥島ト号ケ

或ハ二兒或ハ九島等ノ名アルモ只其モノ其形

等ニ據リ苟苴ニ号ケシニテ島上ニ耕スベキ地

モナク島根ニ船舶ヲ繫クベキ港モナキ荒島也

叔父島ニ二港アリ一ハ大港ト云ヒ一ハ巽港ト

云フ母島モ亦二港アリ一ハ沖村ト云ヒ一ハ片

港ト云フ其中大港沖村ノ二港ハ来往ノ船碇泊

薪水食品ヲ辨スルノ地也抑當島ハ大小八十餘

島南海中ニ羅列シ自然一區ノ地ヲ為セバ住民

モアリレナルベケレバ内地隔絶ノ離島何時ノ

頃ヨリヤ住ム人モナクナリケシ其ハ考フルニ

所由ナケレドモ此島ニ近キ伊豆七島ノ内青ヶ

島ハ舊古ヨリ住民アリシ島嶼ナリシガ

光格天皇ノ天明年中清乾隆年間洋千七百八十年間伊豆七島記安永年

中ニ作ル今南フルモイハクツレ地震巖崩テ地中火氣發リ島内五

十餘ヶ所ニ燃出住民此災ニ罹リ闔島居ヲ八丈

ニ徙レ其後空島トナリシ事凡四十年

仁孝天皇ノ天保ノ始清道光年間洋千八百三十年間次郎太夫ト云

者官ニ申請ヒ再ヒ人ヲ徙レ荒廢ノ地ヲ墾キ今

ハ旧ノ如ク人民ノ住ム島嶼トナレリ此島モ何

レノ頃ニカ然ル比ノ事ニテ住民絶果竟ニ無人

ノ島トナリシモ計難シ是ハ固ヨリ臆度ニテ證

スベキナラネド土地ハ

皇國ノ版圖ナルヲ文祿中見出セリ等云ハ心ナ

キ事ナラズヤ在斯離島ニテ久レク住民モ無ク

又至リ住人モ無ケレバ誰ガ号ル氏ナク無人島

ノ名ハ負セ来リシナルベシ此名称ノ本義ナラ

却説此島ノ事ヲ推考ルニ南島掖玖人三人

推古天皇ノ二十四年隋大業十二年三月歸化セ

レヲ始ニテ其ヨリ以後朝貢絶ル事無ク

御代々ノ朝ニ服從來ル者年ヲ追テ絶ズケ遙後

文武天皇三年唐嗣聖二十年多襪夜久奄美度感

等ノ人朝宰ニ從テ来リ方物ヲ貢獻ス因テ位ヲ

授ケ物ヲ賜フ度感島ノ朝貢此時ニ始レリ于此

朝宰ニ從テ来ルトアレハ先是疾ク所屬ナリシ

ヲ知ルニ足レリ幾程ナク

元明天皇ハ和銅七年唐開元二年十二月少初位

下太朝臣遠建治等奄美今云大島信覺今云八重山球美今云

久米等ノ人ヲ率テ南島ヨリ参来リ翌靈龜元年

唐開元三年正月参朝方物ヲ貢獻ス是琉球諸

島一圓内附スルノ一證ニテ既ニ寛平四年撰進

ノ類聚國史風俗ノ部ニモ國櫟大隼人薩摩大隅多祢

南島掖玖人蝦夷ト並出シテ殊俗ノ部ニ入ラレ

サリレニテ部内ナリレ事判然ナルヲ以テ後ニ
 筑後守新井君美モ南島志ニ南島咸皆内附スト
 ハ記セレナリ南島志和銅六年遠キ支那臺灣ニ
 隣接セシ久米宮古等ノ島々ダニ斯ノ如シ況ヤ
 近キ此島ヲ誰カシヨヅクナラズ
 皇國ノ非所屬トセンヤ既ニ英人格ル化ガ著セ
 ル萬國圖誌日本ノ條ニ無人島及琉球諸島モ日
 本ノ管轄ニ係ルト記レタレハ海外ニテモ

皇國ノ屬島ト称スルノ一證トスベシ旃而已ナ
 ラズ荷蘭瑤函千八百四十五年刷第百一二三葉ニ所載ノ
 無人島移民ノ條ニ一地方ノ形勢ヲ記シ一人民
 ノ風俗ヲ述フ一科程其行事實験ノ世ニ弃レタ
 ルモノニ非カ就理並弗理加ヲ繞リテ行ク海路
 ヲ見出セシ後二百年ノ間ハ太平海中小島嶼ノ
 無數群ヲ為ス者ニ在テハ人ノ心ヲ着ルモノ甚
 稀ニシテ其遺ス所舉テ見ルベカラザリシヲヤ

是班牙アカヒユルコヨリ呂宋諸島へ行ク海路
 ミテ多ク群島ヲ發覺スルハ吾人ノ知ル所ニシ
 テロルドアンソンノガルヨトト一船ノ船中ニテ
 見タル圖ニ見エタル如ク其群島ニ數種ノ名ヲ
 命セリ然レドモ是班牙人此海島ニハ金銀ヲ見
 出ス事ナケレバ其島ヲ所領レ人民ヲ移徙レテ
 カラ竭スモ勞レテ功ナレト思ヒ尾達蘭人ハ力
 作ヲ事トシ交易ヲ以テ世ニ名アリテ此念ナケ

レドモ此島嶼ニ主タルヲ求ル心ナレ太平洋中
 ノ諸島ノ如クボニシ無人群島モ當時是班牙
 和蘭人ノ早ク既ニ知ル所ト為レリ是班牙人ハ
 此島ヲイステステルアルソビス等名ヅケ或ハ
 別名ヲ命セリ又別國人ハ此群島ヲウィステエ
 イランデント名ヅク此ハ日本名スホミン又モ
 ニンジマ共ニ無人ノ名ヲ反譯ナセルニテ人ノ
 栖止セザル島ト云ヘル義也歐羅巴人ハ此海中

ニ来ラカル夕レキ前内裡幕府ヲ誤リ傳ヘ内裡

ルニ改レノ作ノ臣下ニテ此島ヲ見出レタル人ヲ、ヲ

カサヤエ、小笠原ト云ヒレヲ以テ是ヲ其島名ト

為レタリ日本人屢イスタ、是モ伊豆ヨリ彼島ニ

至リテ人民ヲ徙殖セント欲シタリナリ一千六百七

十五年東方諸國ノ歲刊文中ニ長崎ノ三士人行

ク事ヲ記セリ其人ハ此群島ノ土地ヲ測量シテ

度学ニ據リ檢索シテ一図ヲ作ル是ニ諸島諸島

礁ヲ精密ナル記録ヲ附ス其島ノ數八十九ヲ見

出シタリ是延宝三年長崎人島谷市左衛門等ガ巡視ノ時ヲ云也當時此島

ニ居住スル人無キヲ以テ是ヲボニムニ島

ト名ツケテ日本人此名ヲ傳ヘ是ヨリ以後其前ニ

名ツケタル島名皆廢ス昔ヨリ日本ニ其近傍ノ

人ノ通行スベカラザル群島ニ罪人ヲ流徒スル

風習アリ此ノ如キ流徒ヲ攀踏スベカラザルハ

丈島ニモ為セリ此島ハボニ島ノ近傍ニアリ

此島ノ高サ八十ニルヲ以テ此ニ名ツクル
 也新ニ見出セシ群島ハ日本人ノ云ニ據レバ復
 同様流筏ノ地ニ用ウルナルベシ盜賊凶犯ヲ多
 ク此島ニ彼シ土地ヲ開墾セシメシガ此凶惡民
 戸此肥沃ナル島ニテ好便宜ヲ得稼穡ヲ興シ速
 ニ數箇ノ郷黨ヲ結ビ千六百年代ノ半皇朝正徳
 及テハ日本ノ図中既ニ此群島ニ家ヲ營ミ
 テ村落ヲ為セルヲ載セタルモノアリ然レトモ

此ニ其民ヲ流筏シテ永ク後來ニ傳ラズ五十年

皇朝正徳元年ニ當レリヨリ六十年 皇朝享保六年ニ當レリニシテ再ヒ

以前ノ如ク無人島ト為リタルハ何ノ故ナルヲ

知ラズ允テ此島氣候平和ニシテ許多人產物ヲ

生スル地ナレドモ敢テ是ヲ論スル事ナク吝嗇

ナル政ニ從ヘル政官甚故隔絶スル所領ヲ弁ル

事ヲ議セシナルベシ以上横ト見エ又亞米利加

地理辭書ニモボニ又ホニシ或ハアルソヒ

又、等ノ島ハ北太平洋海北緯二十六度三十分乃至
二十七度四十分東經百四十度乃至百四十三
度ニアリテ三島也其ニアル島ヲペルリ、アイ
ランドト云フ其南ニアルヲベイリアーランド
ト呼フ中央ノ島ヲロートル、エン、ケートルアイラ
ンドト号レ其北ニアル島ニハ鯨魚ヲ活業スル
英吉人其外歐羅巴人並サントーウ井々島ノ人
民爰ニ住セリボニン島ハ太平洋海中ニ在ル小島

ニシテ、マゲルラン諸島ニ加ハレリ北緯二十七
度東經百四十一度三十分ニ在リ日本領地ノ人
爰ニ住セリト記シ英國地理辞書ニ云フ所モ之
ト同説ボニン島ハ北緯二十七度東經百四十一
度二十分太平洋海中マゲルラン群島ノ内ニアリ
日本人民モ住セリ
本文
摘要ト見エタリ此ニマゲル
ラン諸島又ハマゲルラン群島等イヘルハ何處
ヨリ何處迄ノ島々ヲ作イヘルニマ萬國輿地全

圖及地球萬國圖等ニモ未ダ詳ナルヲ見ズ其公
有^ト左^レ之^レ有^カ右^マ之^レ海外各國ニテモ小笠原島ヲ
皇國ノ屬島ト云ヘルハ萬國圖誌荷蘭瑤函等ヲ
始^レ迄^クハ彼理日本紀行中無人島ノ条下ニ當然
此島ヲ領スヘキ國ハ疑モ無ク日本ナルベシ此
地ヲ發明スル最モ早ケレハ也若シ日本ヨリ是
ヲ領セサレバ當今爰ニ住スルモノ當然是ヲ支
配スルナルベシト云ヒ和蘭新譯地球全圖ニモ

小笠原洲八丈洲ノ南百余里ニ在リ文祿年間信
濃深志ノ管小笠原民部少輔定頼ト云人草創ス
和俗ヲガシマ^{小笠原島ノ}誤ナルベシト称ス其初無人洲ト
呼フ八十餘島アリト見エ既ニ此書ヲ長崎人松
浦東溪ガ文化七年庚午十一月ニ輯録スル所
長崎古今集覽附録外國集覽中日本ノ條下ニモ
載ヤタレハ西洋千八百九年前疾ク此島ノ
皇國ニ屬スル事ヲ西洋人モ知レバコソ全圖中

ニハ書載セツラノ在斯證文ヲ以テ當島ユ、レ、マノ國
 皇國ノ版圖ナルヲ西洋人モ專ラ稱スハヤセレ
 ヲ知ルニ足レリ然ルニ文化來朝魯西亞使節レ
 サノツトガ奉使日本紀行ニ阿蘭陀人千六百四
 十三年寛永ノ航海ニ見出セシソイゲルエイラ
 ンド南島ノ義即ハハツツイジヲ八丈南同書
 二ニハ丈島ヲ三十三度十五分イラルニ當ル
 エイラント原小島ヲ三十二度三十分ニ記ニ當ル
 ベレト記セレヲ以テ考フレバ寛永二十年ノ航

海ニ荷蘭人此島アル事ヲ初テ見出セシト記セ
 バ未ニ記ス民部少輔小笠原貞頼カ初テ航リ巡
 視レタリシ文祿三年ヨリ五十年ノ後也然レバ
 當島ユ、レ、マヲ巡視スルノ初魁ハ皇國ニ論ヲ後
 ベカラズ却説レサ、ツトハ小笠原島ニ航リ往
 カザリシハ同書同条ニ是ヲ檢セント欲セシカ
 其路ニ到ル頃東差北東風烈シク空暗ク雨降テ
 望ヲ達セズコル子ツトガ針路ハ正シク其島ノ

近キニアレバ其経緯度ヲ詳ニセラルベシト
 アルヲ以テ知ルベシ然レ小笠原島ノ分野ヲ詳
 細ニ記スルモノ多クハ漂流人ノ稟状ニ其
 古ヨリ傳ヘ来リレハ巽無人島記小笠原民部書
 上延寶無人島巡見記長崎島谷市左衛門覺書小
 笠原島記等ノ外見ルベキモノナシ其中ニモ延
 寶巡見記島谷覺書殊ニ證トスベシ文又年間小
 花作之助旧幕臣現今東京府
権典事ニ任セラル小笠原島ニ在勤三

年其間山溪海濱ヲ跋渉シ親シク實地ヲ経験シ
 地図一帖小笠原島風土記ヲ著編ス是全島ヲ知
 ルノ冠トスベシ次ニ薩摩人ノ所著無人島記無
 人島談話嘉永五年吉田正譽通称
文次ガ所記ノ漂客
 談奇等モ證トスルニ足レリ此島ハ丈島トシテ距
 離百八十里ノ南洋中ニ在レハ平常ニ航海スル
 者ナク地理ヲ詳ニスル事ヲ得ズ然レバ伊豆七
 島記ニ世ニ云フ小笠原島ノ事無人島トモ云フ

八青个嶋八丈島ノ者ダニモ知ラズ南海ノ中ニ
 八小笠原島而已ニ限ラズ人無キ無名ノ島アリ
 ト云フ事ヲ聞傳フル而已也先ニ八丈島ニ變船
 ノ漂流寄来テ人ヲ乞ヒシ時ニ彼船人南ヲ指シ
 テ水ヲ汲シ真似ナドレテ見セシ事アリ固ヨリ
 言語通ゼザレハ尋問フベキ様モ無カリキト云
 フ又青个島人ヲ云ヒレハ假令ヨキ島アリトモ
 是ヨリ南方ノ海ニハ再ヒ生テ故郷ニ歸ラバヤ

ト思フ人ノ往クベキ海ニ非ス風吹日ハ萬里ノ
 大洋百万ノ雷ノ鳴ガ如クニレテ天ヤ海海ヤ天
 トモ見エワカズ只一面ニ真白ニゾ見ユル青ケ
 島モ八面大山ノ岩壁ニテ取マハシタル島ナレ
 八波ニ取ラル、事ハ無シ然レドモ大風吹口タ
 リ大山ノ如キ高浪ヨセ来リテ數千丈ノ岩壁ニ
 觸ル、時ハ島根モ碎ケ散ルニヤト思フ許ノ響
 ニテ住慣カル人ノ一日モ居ラル、島ニハ非ズ

十語リレト記セリ是ヲ以テ考フレハ享保年間
 伊豆相模ノ縣令山田治右衛門へ小笠原島巡視
 ノ名命アリレ時八丈ノ島民等南洋ヲ恐レテ航
 海ハ公彼ヲ辞シ出船ヲ肯ゼサリレモ南海ノ大
 洋暴風逆波アル旨ヲ聞或ハ漂流人ガ患苦ノ談
 話等ニテ驟リニ恐怖ノ心ヲ起セシ故也在新里
 俗ハ傳説ヨリ七島記ニ生テ再ビ故郷ニ歸ラバ
 ヤ思フ人ガ行ヘキ海ニ非ズトハ書モレ云モ

セレナルベレ却テ東京ト小笠原島上ノ距離ハ
 前ニ云フ如シ三河口太忠廻島記ニ江戸川口ヨ
 リ伊豆國附島々へノ凡里數大島三十六里利島
 四十三里新島四十七里神集島五十四里三宅六
 十一里御藏六十六里八丈百五十里ト見エ文化
 十二年伊能勘解由ガ測量御用調書ニハ下田ヨ
 リ新島へ十里余新島ヨリ三宅へ八里三宅ヨリ
 御藏へ四里御藏ヨリ八丈へ二十五里下田ヨリ

八丈へ四十五里余三宅ヨリ八丈へ二十五里餘
 八丈ヨリ小島へ三里青介島へ二十五里餘八丈
 ヲリ小笠原島へ巽百八十里トアレテ以テ前ノ
 三河口が廻島記ニ所載ノ江戸川口ヨリ八丈マ
 テヲ計算スレバ三百三十里トナレリ長崎日記
 ニ無人島ハ伊豆ノ下田ヨリ三百五十里ト見エ
 レハ誤ニテ下田ヨリ八丈へ四十五里八丈ヨリ
 小笠原島へ百八十里合テ二百二十五里也仙臺

人林子平が三國通覽附録ニ属スル無人島圖ニ
 所記ノ里數ハ長崎入嶋谷市左衛門が延寶三年
 巡視シテ所作ノ圖及延寶巡査記等ニ據リテ圖
 ヲ作り里程ヲモ書加ヘタレハ是モ下田ヨリノ
 里數相異ル事ナレ然ル懸隔ノ地ナレバ前ニ云
 フ如ク年久行人モナカリレ也現今蒸氣船開ラ
 ケレヨリ萬里モ比隣ノ如レ況僅ニ三百三十里
 今日ヲ以テ見ル時ハ遠シトスルニ足ラズド其

頃迄ハ航海ノ船モ容易カラネバ移民開墾等モ
 隨意ナラザリシヨリ前ニ云フ如ク無人島ハ名
 ラ称フルニ至レドモ是ハ固ヨリ全島海濱開
 皇國ノ版圖ニ入ルルニ至ラズルニ至ラズル
 天皇ノ知食ス大御國ノ一島ナルヲ無人ト名ル
 ハ名義實ヲ失ヒ不相應ト嘗テ本省其義理ヲ民
 部省ニ忠告アリシ事モアレバ他國ニ對シテハ
 必小笠原島ト称フベキハ勿論也支那人ハ當島

ヲ波寧ト書ポフネイシト唱フ其テ島地ニ
 皇國人ハ通辨ニ於テトニ其譯ス西洋人ハ
 レマンアイラシト呼又ボニシ氏云フ是ハ無
 人ノ訛ナルベシ再説固ヨリ此島嶼ハ名小笠原
 島ト称スルハ文祿以降ノ名称ニテ其正ヨリ先
 某島トカ称ヘタリケシハ勿論ナレドモ確ニ書
 記シタルモノモ無ケレバ今コレヲ知ルニ所由
 ナレ然ル比ハ唯小笠原島而已ナラズ間迄ナル

伊豆ノ七島ガ其傳説區ニシテ可否ヲ詳ニ
 セズ加茂郡下田ノ港ヨリ大島ハ卯辰ノ方距離
 十八里新島ハ辰巳ノ方距離十五里利島ハ午未
 ノ方距離十八里三宅島ハ辰巳ノ方二十七里御
 倉島ハ方位三宅島ト同シク距離三十里八丈島
 ハ巳ノ方距離六十四里又八丈ノ支島小島ハ本
 島ヨリ酉ノ方距離僅ニ二里青介島ハ八丈ヨリ
 正午ノ方距離二十里此島ト小笠原島トノ距離

凡百六十里也然レハ伊豆ノ七島ハ内地ヲ離ル
 事僅ナレドモ其島々ノ創開ヲ詳ニセス島々ハ
 説ニハ伊豆ノ島々ハ
 孝安天皇ノ御宇 東周安王十八年 開ケレ音ヲ云
 傳フレド大島新島等ハ殊ニ本州ニ近ケレバ伊
 豆ノ浦々ト同時ニ開ケレナルベシト伊豆七島
 記豆州海島圖誌等ニ云ヘルハ其説當レリト云
 フベシ叙續紀ニ

文武天皇三年假君小角ヲ伊豆島ニ流スト見エ

レ伊豆島六則大島ナリ續紀ニハ伊豆嶋トノミアリテ大島トハ記サレ

ガレドモ元享釋書小角ガ傳ハ伊豆ノ大島ト見エタリ先是ニモ此國ノ島

々ハ有罪ノ者ヲ配流セラレシ事モアルベケレ

ドモ古史ニ所見ナクハ詳ナラズ遙後

後白河天皇ノ保元元年宋紹興二十六年洋千百五十六年

新院ノ御味方ニ参リレ六條判官為義カ八男八

郎源為朝ヲ又大島ニ流サレシニ自ラ謂ラク我

先六南青心島ノ御堂也

清和天皇ヨリ出ツ祖先ノ業ヲ失フベカラス此

地ハ是具

朝廷ヨリ我ニ所賜也タマフトコトトテ大島及三宅島八丈島

美計島澳島ヲ五島ヲ自ラ領シ其租税ヲ奪フト

鎌倉本平井本保元物語ニハ神津島新島三倉島ヲ如ハハ島トス然レドモ大日本史ニ見行本及

京師杉原本ニ従フトア保元物語ニ見エタルヲ

以テ考ラレバ保元ノ頃疾ク伊豆ノ諸島ヨリ租

税ヲ官納セシ事明ナリ又八丈島ハ
 孝靈天皇ノ御宇異朝秦始皇帝長生不老不死ノ
 仙藥ヲ索ム方士徐福往年東海ノ仙山ニ至リシ
 旨ヲ奏ス始皇徐福ヲシテ東海ナル蓬萊ノ山ニ
 遣リ仙丹ヲ求メサセシム徐福其命ヲ奉リ童男
 童女ヲ具レ紀伊國熊野ノ浦マテ参来タレドモ
 不死ノ藥ヲ得ガレハ其身ハ熊野ニテ死レ童男
 ハ今ノ青ヶ島ニ捨童女ハ今ノ八丈島ニ捨置是

有り兩島開ケレ等云傳ラレドモ固ヨリ無誓ヲ
 傳説ニテ證トスベキニアラネテ島々ニ住民ア
 ル事久シキハ論ヲ俟タ然レドモ
 後奈良天皇ノ天文ノ年間八丈島三根村ナル香
 爐山宗福寺浄土宗本別下沙門浮跡ト云ヘル
 僧ノ書ル同寺世代記ニハ
 孝安天皇ノ御宇異人ノ神眷族ヲ具レ東南ノ海
 ニ至リ十餘島ヲ開ク其中ニ遠キ島嶼三ツ是ハ

大小島青介島ナル記ヲ記セドモ是ハ島人ノ傳
 説ヲ記録セシモノナルベケレバ徴スルニ足ラ
 ズド此寺ノ古刹ナリレハ海島志ニ最初西山ノ
 麓ニアリテ香爐山阿彌陀寺トテ一區ノ梵刹ナ
 リレガ海嘯^{ツナミ}ノ為ニ破壊セシラ^レルニ由リ
 後花園天皇ノ永享ノ年間^{明宣徳年間}瑞翁宗的
 ト云フ沙門大賀ノ郷ノ内大里原ニ移レ再興ス
 宗的ヲ六世也トイヘドモ開基以來歴世ノ名ヲ

傳ニズ同十二年^{明正統五年}武藏國神奈川橋本

宗興寺^{曹洞}ノ僧ヲ請レ任職ト為セシヨリ曹洞

ニ改宗レ其後淨跡迄四世ハ宗興寺ニ隸^{ツキ}タリレ

ガ今ハ海禪寺ノ末ト為リ淨土宗ノ梵刹ト為レ

リト云ヒ又一説此寺始為朝ノ神靈ヲ祭り奉仕

ノ者ハ緇素ヲ兼神官ニテ法躰ナレバ入道ノ宮

ト稱ヘ其宮ニ仕フル者ヲ大夫ト稱フ此主徒全

島ヲ押領ス其六世雲加カ時

同御宇ノ康正二年 明景泰七年 武州神奈川ノ領

洋十四百五十六年

主真山宗林ト云者アリ其臣作 或云佐久 右衛門太郎

ヲ八丈島ニ遣リ雲加ヲ襲ハシム右衛門太郎其

虚ヲ窺ヒ雲加カ男若宮及大夫ヲ斬殺シ尚雲加

ニ逼ル事急也雲加勢盡キ降ヲ乞フテ島ヲ作ニ

渡シ亡息ヲ為ニ菩提心ヲ發シ佛門入名ヲ瑞翁

宗的ト改メ自第ヲ一字ノ蘭若ト為シ神奈川ナ

ル宗興寺ヲ請シ入レ開基ノ住侶ト為セシナルハ

此ノ記ニ既ニ其事實島ノ旧記ニアル龍海島誌

ニ見エタレドモ是覺束ナキ説ニテ信用難シ然

レドモ前ニ云フ歴世記ヲ書シ浮跡ハ天文十五

年入院スト同書ニ見エシヲ以テ考フレバ彼歴

世記ヲ記録セシハ天文十五年ヨリ後ナルハ論

ナレ又伊豆七島記ニ或書ノ説ニハ八丈島何時ノ

頃ヨリ開ケシト云フ事詳ナラズ島人ノ傳フル

ハ何國ノ人ニヤ金川宗麟ト云ヘル者渡リ来リ

絹ヲ織ル事ヲ教ヘシトテ一島開祖ト称スト雖
 其年代モ確^クナラズ只口碑ニ傳フル而已コレ
 ヲリ後島産ノ物品ヲ船ニ積ミ載セ交易ノ為伊
 豆相模安房ノ地ニ渡海セシガ其時代關東大
 乱レ戦争止ム間ナク適渡船スル者アレバ僉掠
 奪セラレ數十年ノ間絶テ内地ニ船ヲ寄セズ多
 クハ三宅島マテ航リ交易ヲ為セシガ
 後花園天皇ノ長祿二年
明天順二年
 洋千四百五十八年 北條新九郎

氏茂 七島記氏長ニ作ル北條五代記ニハ氏盛後
 長氏ト改ムト見エ伊勢系圖ヲ考フルニ新

九郎氏茂ハ伊勢守貞親ガ二男ニテ北條ノ養嗣
 ト為リ名ヲ長氏ト改メ後氏茂ニ更ムトアルニ

據京師エ出テ伊豆ニ来リ土着ノ旧家狩野伊東

等ヲ亡シ同國葦山ノ城ニ移リ伊豆全國ヲ略シ

國民ヲ懐ケシ為法令ヲ嚴ニシテ掠奪暴遇ヲ憂

ナク國中治平ナリト聞島産交易ノ船下田ニ乘

来交易ス氏茂島民ヲモ懐ケ従ハシメントテ絹

價ノ外ニ米酒等ヲ與フ島民其恩ヲ感じ遂ニ伊

豆ノ属島ト為ルナド云傳ハレハ前ニ云奥山宗
 林ヲ混レ云ハルニヤ神主奥山カ家説ハ氏茂カ
 為ニ旧領武州神奈川ヲ追テ八丈ニ来リト傳
 其云フトコ也僉ク牙楯今可否ヲ知ルニ由ナ
 又同村曰海雲山長樂寺ハ
 後奈良天皇ノ天文十六年明嘉靖二十六年洋嘉靖二十六年建立
 挑園天皇ノ寶曆四年清乾隆十九年洋乾隆十九年此島ハ漂着

清又江南雲門程劍南浙江若溪高山輝福建榕
 城董昌仁等乘来リレ破船ノ木ヲ以テ山門ヲ建
 立シ其記ヲ書ル中ニ開林以来相傳二百有八年
 見エ且以テ其年ヲ算フレバ則天文十六年
 當レ氏此寺ノ開基ハ尚舊シカルベシ其ハ
 後土御門天皇ノ明應ノ年間明弘治年間明ノ僧
 宗感ヲ始一船此島ニ漂着上陸セルガ時疫ノ為
 僉鬼籍ニ入リ宗感一人存余一寺ヲ建立スト

云々據レバ天文十五年ヨリ五十年余以前ニ此

寺アリレヤ其ハ確^{シキ}ナラネド天文以降于今法統

連綿々川同村海雲山長樂寺禪宗建立
ノ年月不詳什物ニ

後村上天皇ヲ正平二十一年元至正二十六年
洋千三百六十六年八

月大和國廣瀬十樂寺地藏院觀快カ法第祐賢カ

端書ヲ古文書アリト云ヘリ正平二十年ハ則

北朝昌^ニ事^ニ未^シマ^ルト^シハ^シ山門ニ

後光嚴天皇ヲ貞治五年ニ當レバ明應ヨリ百十

年余以前ヨリ此寺モアリシニヤ是等ヲ以テモ

彼島嶼ノ往昔ヨリ盛ナリシヲ想像セシ又足利

家時代ノ旧記ニ島織物ト見エシハ則此島嶼ヨ

リ織出ス絹ヲ云フト伊勢貞丈ガ書ニモ見エタ

レバ其時代ニハ織絹ヲ専ラ都下ニ持出セシナ

ルベシ其餘ノ島々ハ殊ニ疾ク閑ケタルハ前ニ

云フ如クナレド波濤ヲ隔テシ島嶼ナレバ大綱

ノ外租税ヲ定額モナカリケシ北條家没落ノ後

太政大臣徳川家康ヲ関ノ東八州ニ封ラレシ時
 旧例ニ隨セ伊豆ノ島々モ其所領ニ屬スト雖モ
 更ニ租税ヲ定メラルハ事モ無カリシニヤ八丈
 始島々共縣令ノ屬吏廻島レ島吏等カ其年ノ豊
 凶ヲ勘辨シ收納セシ租税ヲ收領シ来ル定法ナ
 リシガ
 光格天皇ノ寛政八年
清嘉慶元年
 洋千七百九十六年
 台命ヲ承ケ伊
 豆相模ノ縣令三河口太忠カ屬吏百々彦市ト云

者廻島レ島々貢税ノ制收納ノ定額ヲ建ツ是徳
 川家ニ於テ七島ノ貢税定額ヲ建シ始也之ヲ以
 テ天正十八年八月同家關東入國ヨリ寛政八年
 迄二百七年貢税ノ法制無リシヲ知ルベシ此七
 島ハ小笠原島トハ異リ伊豆ノ本州ニ近ク自古
 人民絶ス神社佛閣ヲ安置シ租税ノ制モ疾ク定
 メラレシハ保元ニ為朝ガ諸島ヨリノ租税ヲ押
 領セシト見エシニテ諦也是ハ七島耳ナラズ振

古ハ貢調納税ノ制離島ハ勿論属國迄定額アリ

レハ

淳和天皇ノ天長元年唐長慶四年九月太宰大貳

小野朝臣峯守ガ奏議ニ多祓島ハ貢調鹿皮一百

余皮更ニ無別物ト在テ古制ヲ知ルニ足レリ

保元平治ノ戦乱ヨリ内國騷擾止時無ク遂ニ所

屬ノ島々迄ニ命令難達貢税ノ制モ等閑ニナリ

レ等古今ノ沿革ヲ顧ルハ近キ七島ハ前ニ云

フ如シ尚更小笠原島ノ如キ遙遠ノ地ハ其旧名

モ不傳却テ非ヌ無人島ノ名ヲ呼彌旧名ヲ失フ

ニ至レリ此島ノ旧名某ト称シヤ今其ヲ難知ハ

遺憾也扱此島ニ久シク渡海ノ中絶シ縁由ハ既

ニ前ニ云フホトシ今ヲ去ル事二百八十一年ノ

昔

後陽成天皇ノ文祿三年明萬曆二十一年ニ至旧

撰津國飯山ノ城主信濃守小笠原長元ガ養子民

部少輔一本作大輔同氏貞頼始テ此島ニ渡航ス貞頼

ハ信濃國深志今云松本ノ城主大膳大夫小笠原長時

同姓ノ族也享保二十年貞頼カ家系及其家傳等不審ノ事アリトテ幕府小笠原ノ宗

家豐前國小倉ノ城主右近將監小笠原忠晴ニ命

シ傳統及家傳等不審ノ條々ヲ糾問ナセシム忠

晴幕命ニ遵ヒ貞頼ガ曾孫浪士宮内貞任一本作

ヲ忠晴ガ邸内ニ呼ビ審問數回ノ後所約忠晴ガ

一族ナラザルニ決シ其旨ヲ幕府ニ復命ス是ハ

本文享保年中貞任ガ甥民部長晁小笠原島渡航

ノ條下ニ詳ナレバ此ニ贅セズ是ヲ以テ推考フ

レバ巽無人島記小笠原民部記同宮内記三河口

太忠回島記延宝小笠原民部稟狀等一深志ノ城

主トスルモハ僉誤也且以上ノ書及笠系大成

附録新編雜集等ニ長元貞頼ヲ長時ノ嫡孫トス

ルハ殊ニ摸稜ノ説ニテ信スルニ足ラズ享保ノ

論也然レ以テ推セバ長時ガ家トハ別派ナルハ勿

ケリ早ク分派セシ家モアルベ長元嗣ナク貞頼

ヲ養テ其嗣トシ天文迄ハ父子宗家ト俱ニ信濃

ニ居レリ在任ノ地ヲ記スモノナケ抑小笠原家

ハ清和天皇ノ皇子貞純親王ノ裔甲斐守源義光

太郎下稱ス二男左衛門尉義綱ハ加茂ノ社頭ニ
 元服ス因テ加茂二郎ト稱ス三男義光ハ新羅明
 神ノ社頭ニ元服ス因テ新羅三郎ト稱ス刑部丞
 兵庫助等ヲ歴テ後甲斐守ニ遷任セラレ受領ノ
 地甲斐國ニ移リシヨリ以來代々同國ニ住リ嫡
 孫上野介清光ガ長男信義ハ甲斐國巨麻郡武田
 館ニ在ルヲ以テ武田ヲ稱号ト為レ武田太郎
 ト稱ス是武田一統ノ家祖也二男遠光ハ同郡加
 賀美ノ館ニ在ルヲ以テ加賀美ヲ稱号トシ加賀
 美二郎ト稱ス是小笠原一統ノ家祖也其館ノ地

ハ今加賀美山法善寺ノ境內ニテ築地堀ノ形遺
 レリ其男左京大夫長清同郡小笠原ニ館ヲ遷セ
 レヨリ小笠原ヲ以テ稱号ヲ改メレ也其嫡孫信
 濃守長忠信濃國ヲ守護ニ補セラレ同國ニ入部
 セレヨリ以後代々信濃ヲ領シ家門繁榮其家流
 數派ニ別レ國內及他國ニ支流スル者多シ所謂
 南部阿波三好一宮秋山伊奈八代小田伴野大井
 藤崎高鼻鳴海大倉赤澤下條上野米田井田丸毛

中山常葉津田坂田中川島立西條等也其他猶宗
家ノ称号小笠原ヲ称スル者モ亦少カラズ是則
信濃ノ豪族ニテ世々鎌倉將軍家ニ昵近シ柳營
方馬ノ法式ヲ掌リ其師範ヲ役ム當家相承ノ故
實ハ角宿称十一世ノ孫贈右大臣從二位紀船守
ノ長男中納言勝長射ヲ善シ
朝廷ノ射禮ヲ知リ容儀進退ニ長スルヲ以テ世
範ト為レリ其子右兵衛督興道モ善射ノ聲世ニ

聞エ父ガ庭訓ヲ相承レ後近院右大臣源能有
相傳フ能有息女ヲ以テ負純親王ニ配レ經基
王ヲ産ム王成長ノ後方馬ヲ好シ射御共ニ善シ
外戚ノ祖父近院ノ右府ニ請テ射御ノ容儀五善
ニ備進退周旋ノ禮法ヲ承傳ヘ蘊奥ヲ考究ス其
男右馬頭源滿仲父王ノ傳ヲ承ケ精妙也其男鎮
守府將軍賴信モ父滿仲ノ庭訓ヲ承ケ其男鎮守
府將軍賴義ニ傳フ賴義モ父祖ノ庭訓ヲ固守シ

益射御ノ術ヲ考究セシヨリ遂ニ源家相承ル法
 式ト為リ其男鎮守府將軍義家二男左衛門尉義
 綱三男義光等ニ相傳フ就中義光射御ノ容儀ヲ
 好ミ精妙ヲ極ム其男甲斐判官義清ニ傳ヘ其男
 甲斐冠者清光相承レ其長男信義二男遠光共ニ
 父カ箕裘ノ藝ヲ傳習レ以後武田小笠原ノ兩家
 ニ相傳フ因テ鎌倉將軍家兩家ヲシテ弓馬故實
 ノ師範々々レム其例ニ隨ヒ武田小笠原ノ二家

ヲ足利家ニ至テ天尚師範トス然レ氏武田ハ在
 國小笠原ハ在京タルヲ以テ殊ニ小笠原寵遇ヲ
 得タリ先是從三位家系作信濃守貞宗正三位
 後醍醐天皇ノ勅ヲ奉リ屢奉朝方馬ノ故實射
 御ノ術ヲ傳ヘ奉獻感不斜如此武ノ恩寵厚キ
 ヲ以テ家声愈世上ニ雷レリ貞宗ガ祖父彈正少
 弼長氏ニ男子三人アリ長男信濃守宗長父ノ家
 督ヲ嗣キ鎌倉將軍ニ昵近ノ頃ハ邸宅扇ケ谷ニ

アルニ因リ世ハ人ハ扇ケ谷殿ト称セシ也ニ男
 政宗ハ山中ト称レ一家ヲ為シ三男光宗若狹ニ
 移リ又一家ヲ為シテ鎌倉ニ勤仕ス後ニ足利將
 軍ニ昵近シテ馬ノ禮式ヲ掌ル事宗家ニ等シ此
 家ヲ作テ若狹ノ小笠原トハ称ヘシ也然レ武
 田小笠原ノ両家ハ兄弟ノ家ニテ甲斐ト信濃ニ
 在リテ其因モ懇篤ナリレガ何時ト無ク親戚ノ
 情疎遠ナリ貞宗九代ノ裔信濃國深志
今云松本城

至大膳大夫長時ガ時ニ當リ大膳大夫武田晴信
 隣國ニ侵入シ地ヲ畧スル事廣大ニシテ其餘勢
 漸々信濃ニ波及シ竟ニ長時ガ所領ニ逼レリ長
 時太ク晴信ガ同族ノ所縁ヲ失志殺狼ノ所為ヲ
 働ク其刺薄貪婪憎ムニ餘ル暴虐也ト深ク忿怒
 ヲ起シ同宗ノ因ニ此ニ絶エ忽チ両家ハ中吳越
 ハ思ヒテ為シ竟ニ兵端ヲ開キレヨリ鬪戰數年
 互ニ龍虎ノ猛勢ヲ張り勝敗牛角然レドモ長時

が兵備最モ堅固且主客ノ利不利動モスレハ甲
 州ノ兵討退ケラル、事敷度晴信其不利ヲ憤激
 レ兵ヲ募リ大舉シテ天文二十二年小笠原忠忱
家系貞慶ガ
譜中天文十八年ニ作ル然レハ甲陽軍鑑信濃軍
記桔梗ヶ原記諸國城主代々記藩翰譜等食二十
 二年トス活字版日本外史二十三年ノ條ニ載ス
 如此諸書ヲ指シテ當否ヲ詳ニセズ因テ旧説ノ
 多キ方ニ隨ヒ姑ク五月六日獅子奮迅ノ勢ニテ攻
 来リシカバ長時ガ本陣同國桔梗ヶ原ニ出張シ
 陣場ニ段ニ備ヘ防キ戦ヲト雖モ三村肥後入道

父子ガ叛心ヨリ同七日遽ニ内外ニ敵ヲ混シ方
 略忽敗レ小笠原家ノ士卒二千餘人ヲ討レ防禦
 ノ術盡キ難戦ヲ干此極ム甲州ノ兵深志ノ手ノ
 乱ル、ヲ見勝ニ乘リ破竹ノ勢ニテ巳ニ深志ニ
 攻寄ル躰ナレハ長時戦ノ挽回シ難キヲ察シ熱
 井一本杉ヨリ晴信ガ本陣ヘ使者ヲ以テ深志ノ
 本城ヲ武家ニ亘シ其一家退城ス晴信大ニ悦ビ
 武田小笠原ニ同統ノ源氏也何カ苦シカルベキ

甲斐_ニ来_ラバ同國ノ内ニテ所領一所ヲ進_ラセ
 シト云セタリ長時其言ヲ聞テ兩家ノ先祖ハ兄
 弟ニテ武田ハ兄ナレドモ甲斐ノ守護專務トシ
 常ニ國ニ在テ柳營ニ昵近スル事少也小笠原ハ
 弟也ト雖モ京師ニアリテ花營ニ咫尺シ籠遇殊
 ニ厚ク常ニ武田ガ下ニ立ズ戰ヒハ時運ノ然ラ
 シムル所豈悔_フル事アラシヤ戰場ノ勝敗ハ武
 門ノ風習假令運尽自又ストモ今長時ガ代ニ至

テ彼家ノ被管タラシ事ハ思ヒモ寄ラヌ事也ト

直子ニ同國伊奈ノ郡下條ニ退_キ貞慶譜ニ天文

月十九日父長時林城退去村上左京大夫義清ヲ

頼_ミ同州中島ニ到ル同十九年庚戌三月川中

島ヲ出テ同州中洞山ニ籠_リ同二十一年壬子十

二月中洞山ヨリ越後ニ到_リ上杉謙信ヲ頼_ミ此

ニ居ル貞慶皆ユレニ從_フト見エタレドモ前

記ニ載_スル如ク年次合ヒ難キニ因_リ姑ク桔梗ケ

原記ノ趣準備ヲ調ヘ越後ヘ到_リ彈正大弼上杉

輝虎ヲ頼_ミ寓居ス長時ニ三子アリ長男右馬助

初名又長隆ハ越中國外山ニ討死シ二男貞次ハ

夕程

一時武田晴信が養子ト為リ有故テ深志ニ生害
ス因テ残ルハ三男小僧丸後喜三郎ト稱ス元服
右近衛將監ニ任スルヲ以テ右近大一人ニ笠
夫トハ推シ稱ヘシ也名ヲ負慶ト云一人ニ系
大成附録新編雜集ニ小笠原民部長啓小笠原家
大総領也ト自稱ス長啓ガ説話ニ大膳大夫長時
ノ嫡男ヲ民部大輔長頼ト云二男右馬助長次三
男右近大夫負慶其餘女子二人アリ長時信州没
落ノ時ハ先是長頼ハ越中外山ニテ討死シ其嫡
子信濃守長元其子民部大輔負頼右馬助長次右
近大夫負慶以上四人ヲ同道ニ駿州富士ノ別當
ニ内縁アリテ其所ニ至ル別當ノ由緒ハ失志ス
新テ別當ノ風説ヲ聞同河ノ潛居最危ニ聞工兵ヲ
向クルハ風説ヲ聞同河ノ潛居最危ニ聞工兵ヲ

幼稚ナレバ其儘別當ニ委託シ三人ヲ伴ヒ伊勢
國ニ至リ榎倉大夫ガ家ニ居リ後長時ハ會津ニ
移リ居テ安クセバ三人ヲ伊勢ヨリ呼迎ヘシト
思ハレケル折柄忽事ニ遭テ同河ニ卒去セラレ
ト記シ日夏繁高ガ武藝小傳ニハ長時終去信
濃移北越後之伊勢居榎倉大夫之家此時三好長
慶為天下執權由為小笠原氏族遣使招長時長時
注京師謁將軍家為方馬師範於河内國高安賜十
七所為之采地其後義輝公為三好被害此時長時
到會津天正十一癸未年二月廿五日於星野味庵
宅卒六十五歳号麒麟翁正麟其子喜三郎後號右近
大夫負慶与父同到奥州ト見工芦名分限帳ニ軍
者二人信州松本城ル本トハ頃護ニ復ル後地名
成心許カ之浪人小笠原大膳大夫長時相州岡崎
浪人楠右京大夫橋正範トアルヲ以テオモハ
芦名扶助ヲ受テハ勿論也藩翰譜ニハ長時

小野

中越後ヲサレテ落行奥ノ芦名ニ迎ヘラレテ我
身ハ會津ニ下リスニ三男右近大夫貞慶ヲハ織
田殿ニ進ラセタリ畧貞慶ニ歳ノ時國ヲ出今年
再ヒ本國ニ歸リ入り悦フ事限リ無ク頓テ會津
ニ使ラ立テ父長時ヲ迎ヘントス畧ト記シ小笠
原系因貞慶譜ニ天文二十三年甲寅長時越後ヲ
出テ幾内ニ志ス時ニ貞慶ヲ家臣征矢野大炊助
宗澄ノ妻ニ記シ信州ニ止ル此時貞慶十歳余
ニシテ所々ニ浪宰其後長時模州芥川ニ居給フ
事ヲ聞彼所ニ趣畧ナド有リテ長時信濃落去ノ
時貞慶ノ幼少ナリレハ論ヲ議ズト雖モ二男以
下並ニ嫡孫等ヲ召具セシ事諸記ニ所見ナク惟
笠系附録中新編雜集ニ所載ノ民部長啓ガ説話
而已且其説話大ニ諸記ト牙楯スト虫赤々可否
ヲ決定マシルノ據ヲ得ズ因テ姑ク小笠原家記結
梗介原記藩翰譜異無人島記等ニ據リテ本文ヲ

夕霧

編次ニ以下長元貞頼ノ傳ニ至テハ頗ル信用難
キ事多シ然レトモ考訂スベキ旧記モナク正史
軍記物語等ニモ所見無キヲ以テ巽無人島記並
翁草小笠原宮内記同氏部記等ノ説ニ據レハ疑
フベキ件々少シトセズ宗家長時深志在城ノ頃
後日證文ヲ得ハ可補ニ在リレカドモ宗家没
マテハ長元父子モ信濃ニ在リレカドモ宗家没
落ノ上ハ同國ノ住居モナリ難ク微服潜行シテ
上野國ニ潜匿スル事多年延寶度民部長啓ガ稟
状ニ所載如此然ルニ
笠系大成附録新編雜集中長啓ガ説話ト大ニ牙
楯ス其可否何レヲ是トシ何レヲ否ト決ムベキ
確證ナケレバ姑ク延寶度
幕府へ稟上ハ書ニ據ル
徳川家康三河國岡崎

夕霧

ノ城ニ在テ長元父子ガ零落ヲ恤レニ永祿七年
招キ寄セテ同國ノ内ニ居ラレノ扶助ヲ加フ父
子家康ノ懇志ヲ感レ其麾下ニ属テ戰場ニ出ツ
此頃三州一向宗ノ門徒等蜂起レテ國中擾乱ス
旃而已ナラズ東條ノ吉良義昭抵衡接戦止時ナ
ク遠州モ亦騷乱レ兵馬ノ馳駈暫時ノ寸隙ナレ
長元父子其毎度ニ烈戦レ軍門ニ勲功ヲ顕ス家
康其忠勤ヲ褒賞レ感状證文敷通ヲ與フ此頃織

夕
釋
卷

田右府其息女ヲ以テ家康ノ長男岡崎三郎信康
ニ嫁セシメシト約レ兩家ノ間際最善カリシカ
バ長元父子ガ履歴及勲功アルヲ傳ヘ聞小笠原
ハ信濃ノ豪族ニレテ清和源氏義光ノ流ニテ録
倉ノ右大将頼朝武家棟梁創業ノ時伊豆守義範
ハ義家ノ曾孫ニテ父ハ從五位下義重祖父ハ從
五位下義國上總介義兼ハ同曾孫ニテ父ハ從五
位下義康祖父ハ從五位下義國武藏守惟義遠江

小
島
傳

守義定信濃守遠光等ハ甲斐守義光ノ曾孫ニテ
食父祖ハ五位ニテ高家也且ハ幕下ノ近親ナリ
三浦秋父千葉上總等ノ氏族ハ六孫王以降ノ被
管ナリ其等トハ一列ナラス自然ト敬禮ヲ殊ニ
ス其流例ヲ以テ終ニ北條九代執權ノ間モ右幕
下ノ定ノ如ク新田足利武田小笠原等ノ氏族ハ
源氏一門ノ貴族トシテ崇敬等倫ニ超テ位階ノ
淺深ヲ問ハズ諸家ニ冠タルハ武田信義ガ無官

ニレテ諸氏ノ有官ニ先ガツヲ以テ推知ルニ足
レリ足利尊氏將軍ニ拜任ノ後ト云ハ氏亦此定
ヲ改ル暇又無カリケン全ク鎌倉ノ旧ニ沿從ス
應仁ノ戦亂後在新禮式モ多ク闕如シ禮儀太々
乱ル然レモ小笠原ハ方馬ノ故實ヲ知ル家ニテ
其覺モ他ニ異リ世々柳營ノ寵遇厚シ所領ハ信
濃國筑摩安曇伊奈ノ三郡ノ内ニテ田七千五百
町此獲稻三百七十五万束ノ直錢卅二万五千貫

文此穀十八万七千五百石今量十八万千八百三
十一石八斗七升五合此玄米八万六千三百七十
石一斗九升余是小笠原ノ家領其餘玄米九千九
十一石五斗九升三合余ハ信濃守護職料合テ九
万五千四百六十一石七斗八升三合餘ヲ領レ来
リ尚長棟長時ニ至リ隣接ノ地ヲ略シ數万石ノ
所領ヲ加ヘ武威ヲ近境ニ奮テ暗信其稜威ヲ狐
猜同族ノ旧交ヲ忘レ兵ヲ起シ新許ノ名家ヲ断

夕
穉
者

絶ヤセシメ遂ニ其衆族四方ニ離散シ零魂セシ
テ愍然也トヤ思ハレケン家康ニ通報セ長元父
子ヲ徵シ天正九年八月修理亮柴田勝家奉行シ
テ撰河泉三州ノ内ニテ十二万石ノ所領ヲ與ヘ
撰津國飯山ニ居ラシム莫無人島記ニ此時負頼
ハ別ニ参遠播三州ノ
内ニテ四万七千石ノ所領ヲ与ヘ播磨國室ニ居
テシムト見エタレドモ享保度負任ガ答書ニモ
長元ヲ飯山ニ居ラシメ撰河泉三州ノ内ニテ十
二万石ヲ与ヘレ事而已ラ記シ負頼ニ別封アリ
レ事ヲ記サズ總テ負頼ガ家傳疑フベキ事多キ
ハ既ニ前ニ云フ如シ是ハ其時代ノ軍記物語諸

夕
穉
者

家ノ記録等ニ長元負頼父子が事蹟所見ナケレ
ハ今省テ録本文ニ載セズ又負慶ガ傳モ今小笠原
家相傳負慶譜ニ長時野載ト藩翰譜ニ所記ト太ク
楯ス藩翰譜ニ長時野載ト藩翰譜ニ所記ト太ク
名ニ迎ヘテレテ我身ハ會津ニ下リ住ミ三男右
近大夫負慶ヲバ織田殿ニマ開テセタリ天正十
年ノ春木曾左馬助義政武田ニ叛キテ織田殿ニ
從フ三位中将信忠卿信濃國ヲ經テ甲斐ノ國ニ
責入テ遂ニ武田ヲ討七レ木曾ガ功莫大也其賞
是輕カレ武田ノ本領ナレバ木曾郡ハ云フニ
及バ同國深志ノ地ヲ添テ下レテ予フ幾程ナク
テ今年六月織田殿ノ父子マタ討レ給ヒ甲斐信濃
ヲ討從之乱キル右近大夫負慶急キ馳下リ本國
等ノ國々ニ亂キル右近大夫負慶急キ馳下リ本國
ヲ討從之乱キル右近大夫負慶急キ馳下リ本國
作仰リ蒙リ目レカ由記ハニ載セ川殿ノ年コロノ郎等溝口美
一ツ人ヲ百具レ信濃ノ國ニ馳下リ先夕尻ト云

夕
程
程

フ所忍居テ地下人等ヲ催スニ累代ノ主君也
トテ從フモ少カラズ譜第ノ家子郎等馳加テ
程十ク多勢ニナリレカバ頓テ木曾ヲ討ントス
義政ニハニモ懐難深志ヲバ負慶ニ避ケ且レ遠
々木曾ヘゾ逃歸ル負慶ニ歳ノ時國ヲ出今年再
ヒ本國ニ歸リ入悦フ事限リ無ク頓テ會津ニ使
立テ父長時ヲ迎ヘントス長時今苟且ガ程ヲ生
ノビズ石仕フ小童ノ為ニ刺レテ死セレバ無慙
ナルト見エタルニ據レハ負慶ハ天文二十一年
ノ生ニテ天正九年長元ヘ撰河泉ニテ十二万石
ノ地ヲ午ヘレ時負慶ヲ織田殿ニマ開テラストノ文ヲ
濃ヲ出ル時負慶ヲ織田殿ニマ開テラストノ文ヲ
以テ考フレバ此時負慶ハ織田家ニ在リレハ勿
論也然ルニ負慶ニハナル事モ無ク長元ヘ許多
ノ所領ヲ午ヘレト云フハ信用難キ説ナラズヤ
然レ氏藩翰譜ニ所載ト負慶譜ニ所記モ示予楯

夕
程
程

夕
釋
者

スルニ似タリ貞慶譜ニ童名小僧九喜三郎右近
大夫從五位下天文十五年丙午八月十二日生於
信州筑摩郡林城同十八年巳酉七月十九日父長
時林城退去村上左京大夫義清ヲ頼ミ同州川中
島洞ニ到ル同十九年庚戌三月川中島ヲ出テ同州
中洞ニ到リ同二十一年壬子十二月洞山ヨ
リ越後ニ到リ上杉謙信ヲ頼ミ此ニ居ル貞慶皆
コレニ從テ同二十三年甲寅長時越後ヲ出テ幾
内ニ志ス于時貞慶ヲ家臣征矢野大炊助宗澄カ
妻ニ託シ信州ニ止ム此時貞慶負慶十歳余ニ
テ河々ニ浪宰其後長時攝州芥川ニ居ル事ヲ聞
被テ河々ニ趣キ貞慶成人京洛ヲ經回シ公武西家ニ
遊又日野權大納言藤原輝資卿ノ女ヲ娶永祿十
二年巳巳正月六條合戰ノ時貞慶並一族三好ニ
馳加テ洛西桂川ニ戰フ三好終ニ和州ニ退テ多
門ノ城ニ入ル貞慶モ同ク麓城ニ城門一方ヲ守

ル天正二三年ノ頃貞慶信長卿ニ謁ス而シテ信長
卿ノ命ヲ會ニ諸將ト軍國ノ用ヲ計リ關東及越
前越後佐渡等ニ到ル事數回也天正七年己卯八
月二日貞慶奥州會津若松ニ到リ父長時ニ謁ス
于時貞慶同八年庚辰五月中旬貞慶奥州ヲ出テ
幾内ニ趣信長卿ノ為ニ所々ニ馳走同十年壬午
二月織田城介信忠卿軍ヲ甲州ニ出シ武田四郎
勝頼ヲ攻ム時ニ甲信騷亂ス貞慶曰領ニ復シト
欲ニ幾内ヲ發シ信州ニ趣安曇郡金松寺ニ入曰
好ニ被管善ヲ催ス諸士馳テ金松寺ニ到リ貞慶
ニ謁ス于時木曾左馬頭義昌コレヲ聞テ將ニ兵
ヲ進メ金松寺ヲ襲ハシトス而レ氏群參ノ諸士
數輩故ニ義昌未テ擊ツ事ヲ得ズ于時信忠卿上
謁訪ニ着レ給フ貞慶彼所ニ趣キ本領安堵ノ書
ヲ領スヘレトテ上謁訪ニ趣ク而レ氏今度義昌
成功アルヲ以テ上謁訪ニ信忠卿筑摩安曇ノ西郡

小
略
書

夕霧

ヲ義昌ニ加授シ深志ノ城主トナシ貞慶時ノ未
タ至ラザル事ヲ知テ諏訪ヨリ直ニ洛陽ニ趣ク
手時從士殆分散ス同年六月信長卿京洛本誌寺
ノ変アリ貞慶謀成ラサル事ヲ知テ畿内ヲ辞シ
三州岡崎ニ到リ家康卿ヲ頼テ其家臣石川丹後
守ガ館ニ居時ニ關國擾乱ニ頼テ鬪争屢起ル信州
ニ於テ貞慶旧好ノ士密ニ貞慶ヲ尋ヌ于時家康
卿ニ倚テ三州岡崎ニ在ト聞則密使ヲ岡崎ニ遣
ス貞慶喜テ速ニ三州ヲ發シ信州伊那郡下條ノ
館ニ入旧好ノ士ヲ催ス七月十六日深志ノ城ヲ
圍ニ攻ム城主越後ニ退同十七日貞慶入城三十
余年ノ鬱憤ヲ啓キ深志ヲ改メ松本ト號スト見
工其趣大ニ相異リ創業記ヲ始武藝小傳兵家茶
話等ニ所載トモ齟齬スト雖モ天正九年ノ頃織
田家ノ為ニ奔走忠勤セシハ明ナレハ家ニ功勞
アル貞慶ニハ所領ヲ与ヘズ長元父子ガ他家ニ

功ニアルヲ傳ヘ聞許多ノ所領ヲ与ヘシト云フハ
最覺束ナク且小笠原ハ旧家也トセハ貞慶ハ正
嫡也有功ノ正嫡ヲ閣キ無功ノ長元ハ莫大ノ恩
典ヲ行フ事ハ可疑ノ限也斯不審多ト雖モ照準
スベキ正史無ケレバ姑ク巽無人鳥記明レハ天
民部記宮内記等ニ據テ本文ヲ記ス
正十年二月三位中将織田信忠甲州ニ進軍シ武
田勝頼ヲ攻ム勝頼敗レ新府ニ退ケリ左馬助小
原家譜 木曾義政 一本 織田家ノ為ニ有忠迎木曾
作頭 八累代ノ旧領ナルヲ以テ安堵ナサレノ今般ノ
恩賞ニハ筑摩安曇ノ地ヲ加ヘ深志ノ城ヲ与フ

夕霧

夕霧

因テ義政同所ニ轉居ス其他有功ノ者ニハ僉賞
典ヲ行ヒ暫ク信甲ノ西國鎮靜鼓腹ノ秋ニ遭リ
同年六月二日日向守明智光秀逆意ヲ企信長父
子ヲ京師ニ弑ス此說忽諸國ニ風聞シ信甲ノ二
州復蜂ノ如ク起リ大ニ擾亂ス負慶維時マデ織
田家ニ隨從京師ニ在リシカドモ信長父子薨セ
ラレ今ハ頼ニ寄ルベキ庇蔭モ無ケレバ京師ヲ
去テ三州岡崎ニ至リ家康ニ依頼シ其臣石川丹

後守ガ家ニ寄留ス家康諭テ負慶ニ本國信濃ヲ
討シム負慶雀躍幸來ノ郎等溝口美作一人ヲ召
具シ潛ニ信濃ニ馳至リ先沙尻ニ忍土地ノ動靜
ヲ窺陰ニ地下人ヲ促ニ累代ノ主也トテ來リ從
フ者少カラズ追々傳ヘ聞テ小笠原家譜代恩願
ノ家子郎等馳集リ幾程モ無ク多勢トナリシカ
バ今旧領ヲ侵シ領スル共本曾義政也彼ヲ討テ
父ノ旧貫ヲ挽回スベシト專軍議ヲ為シ事已ニ

小霧

夕
程
書

及ントス義政カ風カニ其強勢ヲ聞テ詮抵衡カトモ
勝算ノ目的ナレト大ニ恐怖ニ暫時モ耐タ兼深志
ヲ避テ負慶ニ且レ這々木曾ニ逸ニ歸リレカバ又
ニシ覺ラズレテ忽旧領ニ復リ父カ會誓カ恥辱カ
雪クハニナラス其身ニ歳カ幼思ニテ國ヲ出他
國ニ在ル事三十年今日再ビ復旧カ時ニ違テテ
甲乙相共ニ悦ブ事限りナク然ラズ父長時ヲ迎
ヘントテ頓テ使テ會津ニ立レ長時今日且レト

ノ間ニ妾ハ逆意ニ因リ側近ク召仕シ小童ヲ為
ニ弒セラレ遂ニ長時ハ旧領ニ歸ル事ヲ得ガリ
レカドモ負慶ハ深志ハ本領ニ復ス是ハ小笠原家
再ニ信濃ヲ領スルノ崖略也後負慶ガ嫡男兵部
大輔或云秀政ニ家康ハ嫡子三郎信康ハ息女ヲ
配スヤ兩家ハ交情最モ厚シ同十八年負慶尾藤
甚右衛門ヲ扶助シタル事ニ因テ一時所領ヲ没
収セラレレカドモ家康ニ内縁ナル事ニ對シ思免

夕
程
書

アリシカバ永グ徳川家譜代ノ列ニ加ヘ二万石
ノ地ヲ与ヘ下總國古河ノ城ニ居ラシム先是天
正十一年正月長元病テ飯山ノ城内ニ卒ス秀吉
如何ナル所存マ有リケン負頼ニ父ガ遺領襲封
ヲ許サズ負頼毫ホモ其身ニナヒル罪ナクシテ
所領ヲ収メラレ忽無禄ノ遷客ト為リ方術ヲ失
ヒ殆困難ニ迫レリ家康之ヲ恤ニ直書ヲ贈リ再
ヒ三河國ヘ招キ須濱ニ居ラシム扶助シ其臣等

徳川家譜代

モ多クハ徳川家ノ臣ニ加ヘ尚残レ居ル一家ノ
輩ニ分配スベシト令レ當分負頼ハ徳川家ノ厄
介ノ體ニテアリシヲ家康事ニ徇レ機會ヲ計リ
時ノ宜ヲ察秀吉ニ愁訴ニ及ビシカバ漸納得シ
負頼ハ小笠原ノ嫡々ナレバトテ改元五万石ノ
地ヲ與ヘ攝州三田^{ササ}ニ居ラシム同十六年四月十
四日^{ササ}謝^{ササ}^{ササ}^{ササ}^{ササ}^{ササ}^{ササ}後水尾天皇秀吉ノ聚樂ノ亭ヘ行幸ノ時足利

水尾

夕務

將軍ノ室町ノ亭ニ行幸ノ先例ヲ問フ負頼其
例ヲ明細ニ註進ス秀吉感賞小笠原ハ禮法ノ旧
家嫡々一家ノ子々孫々マテ四位ニ叙レ近衛ノ
少將ニ任セラルベキ旨ヲ奏レテ永宣旨ヲ蒙リ
尚行幸ノ時聚樂亭内ノ師範スベシト秀吉家
康連判ノ證文ヲ與フ同十八年小田原ノ役ニ從
ヒ戰功アリ文祿元年秀吉兵ヲ朝鮮ニ出ス此時
負頼軍監ト為リ渡韓歸陣ノ時肥前國名古屋ノ

陣營ニ祇候ス家康密ニ機嫌ヲ窺ヒ負頼再ヒ台
罷ヲ蒙リレヨリ粉骨碎身恩渥ニ報ント小田原
ノ役ヲ始數度ノ戰功アリト雖モ未々勲賞本領
ノ高ニ復ルニ至ラズ家從ノ禄モ不足ナルベケ
レト現今ニ朝廷ノ御料殿下ノ所領ヲ始天下ニ
無主ノ地ナケレバ加封アルベキ小地モ無レ仰
願ハ今可然無主ノ島嶼ニ往航ラセカヲ尽シ其
地ヲ拓キ彼ガ所有ト為サレムニ訴フ秀吉

夕務

其所說ヲ容レ許可ス家康直々ニ航海免許ノ官
券ヲ与フ負頼深ク怡悦ヨクニビ名古屋ヲ開船南海ニ
乘出何所ト定ムル目的ニ無ク帆ニ艘ニ艦ニ漕
セ同七月二十六日八丈ノ巽ニ方リ香渺タル洋
中ニ三ノ離島ヲ見艦ヲ向テ激波ヲ凌キ辛シテ
島根ニ至レ六周囲小島八十余是則今云小笠原
島也直ニ船ヲ海灣ニ入レ投錨岸ヲ攀テ島上ニ
登レバ大樹生草茂島木間ニ群イカリヲコロシニ降テ海濱ニ至

レバ白波鼓声ヲ響シ浪花岸ニ散リ鱗介海洋ニ
充ツ斯全島ヲ跋渉シ巡視ノ崖略ヲ記シ暑ヲ加
ヘシ木標ヲ島中兩所ニ樹テ草木禽鱗藻ササナリハ勿論
其餘諸ノ土産ヲ採獲尚本屬諸島ノ輿地圖ヲ製
リ携ヘ帰テ家康ニ就キ往還ノ航海全島ノ巡視
且各島僉無人ノ域ニテ人跡殆タニナク草木禽魚
等ハ内地ニ目馴サルモ少カラズ總テ島山タ為
體海灣ノ廣狹其淺深ニ至ルマテ親ク目撃ヲ願

小笠原

小笠原

外紀

未地圖ヲ攤ヒガ指示レテ詳細ニ演述ス家康然諾
直ナニ秀吉ニ報ク秀吉深ク負頼ガ勇悍偉烈ヲ
褒賞シ巡視ノ諸島ハ永ク負頼領知スルキ旨自
筆ノ證文ヲ授與ス家康モ其鴻業ヲ感シ自今嶋
名ヲ小笠原島ト号ケ偉功ヲ後世ニ傳フ心レト
指揮ス是小笠原嶋ト称フルノ推輿也負頼ニ男
子二人アリ兄ヲ重信ト云ヒ弟ヲ長直ト云フ重
信ハ秀吉ノ名命ニ因テ服部カ家ヲ嗣キ左京ト

称レ三方五千石ノ地ヲ領ス然ルヲ以テ長直父

負頼ガ所領ヲ襲後五位下ニ叙シ民部少輔家系作後

四位下信濃守者難信用ニ任レ尋テ播磨國皇ニ居レリ慶長

十九年右大臣豐臣秀頼家康父子ト疎意互ニ吳

越ノ情ヲ祭レ同年ノ冬秀吉恩顔ノ士ハ勿論諸

國ノ浮浪ヲ募リ難波ノ城ニ籠テ徳川勢ト抵衝

ス此時重信ハ招ニ応レ城内ニ入り秀頼ノ為ニ

戦死ス長直ハ關東ノ麾下ニ属シ其後ニ小切ア

外紀

水レカドモ家康父子重信が葦城ヲ深ク憎ミ必
竟負頼ガ徳川家ノ旧恩ヲ忘却シ不義甚キニ非
スヤ其罪不軽ト忽長直ガ所領ヲ没収シ僅ニ負
頼草創ノ離島ヲモテ残シテ今ノ躬開拓シテ一
懸命ノ地下為スベシト嚴令セシヨリ西ビ所領
ニ離レ卒ニ釜魚ノ思ヲ為シ室ヲ去テ上野國館
林ノ城下ニ潛匿シ父子此地ニ光陰ヲ將テ事多
年負頼是ヨリ前後數渡航ス寛永二年ニモ又航

夕
夕
夕
夕

リ只管民ヲ移シ土地ヲ拓クノ計策ヲ旋ラセド
モ邈遠ノ離島容易ク成功ヲ遂クベキナラネバ
果サズレテ病病ニ罹リ竟ニ鬼籍ノ人員ニ入り
又長直父が生前ノ志ヲ遂ナルヲ歎キ傷心シム
レ共生質多病數年ノ光陰ヲ空クヌ斯テ在ルベ
キナラズバ奮祭シテ渡島ノ志ヲ立ツ然レドモ
寛永丙子ノ年一般海外へノ渡航嚴重禁止アリ
レヨリ以後假令版図ノ内タリト雖モ許可無ク

夕
夕
夕
夕

シテ漫ニ渡島ナリ難ケレバ稟文ヲ呈シ歎キ許
ラレトモ遠洋中ニ離島外國渡航ニ紛ラハレキ
故ニヤ又別ニ嫌疑ノ事ヤアリケン遂ニ台許ノ
沙汰モ無ク其依在再宿志ヲ果スコトヲ得ズ長
直ガ幼名ヲ彦セト呼ヒシヲ以テ浪々ノ後再ビ
幼名ヲ通稱トセシニヤ延宝ノ度民部長啓ガ稟
上ノ書ニハ父彦セト記シアレハ也却説館林ニ
潛匿ノ以前長直其父貞頼ト共ニ武州鉢形ニ隱

夕霧

栖ノ年間土岐彈正某ガ女ヲ聚リル後館林ニ轉
居シ長啓ヲ生マス長直有故テ人ヲ担フ事アリ
テ妻子ヲ旧臣鈴木茂助ニ委託シ江府へ出テ竟
ニ宿怨ヲ遂ゲ假ニ變名シテ熊田太郎左衛門ト
稱シ落飾ノ後法名ヲ宗與ト改ム初館林ニ来リ
レ砌未ダ子ナカリシニ因リ同所ノ市民中村助
左衛門ガ男子ヲ養テ子トシ次郎右衛門ト名告
セ江府ニ出シ幕府ノ縣令神尾五郎左衛門ガ屬

夕霧

夕霧

更代^手ト為リ郡縣ノ事ヲ務ム其後宗與ガ妻妊テ
長啓ヲ産ム其知名ヲ彦次郎ト呼ビ成長ノ後六
郎兵衛ト称ス是モ亦出府シ同縣令前田左衛
門ガ屬吏代^手ト為リ義兄ト職役ヲ同クセシカド
モ一ツノ胸算アリテ幾程無ク職ヲ辞シ熊田ヲ
改メ本氏小笠原ニ復シ通称ヲ民部名ヲ長啓ト
称ス長啓ガ外戚ノ伯父靈峯六京都妙心寺ノ塔^{タツ}
頭麟祥院ノ現住タリ靈峯常ニ達師ノ法ヲ歡ビ

教外別傳止觀ノ窓ニハ松凡羅月ヲ友トシテ魔
佛本未空ノ眼ヲ開キ不立文字ノ座禪ノ床ニハ
意馬心猿ヲ鞭テ有漏無漏ノ塵ヲ拂フ拂子如意
ニモ耻ベケレドモ俗縁モ亦捨難キ所ヤアリケ
ン甥長啓ガ祖父負頼ガ旧功ハ勿^{サテ}論長啓モ草莽
ノ浮浪士ニ埋レ果サセシ事コソ不便ナレト嘗
テ幕府ノ秘閣書監池田勘兵衛ト芝蘭ノ交アル
ニ因リ同人ニ長啓ガ家傳負頼ガ有功ノ顛末ヲ

小啓

告ケ一家ノ再興ヲ依頼ス勅兵衛其意ヲ得閣老

美濃守稻葉正則ニ怒訴スト雖氏未だ発達ノ時

運ヤ至ラザリケン竟ニ事成ラズレテ久シク中

絶ニ暨ベリ以上ハ巽無人島記延寶度長啓稟状

内記笠系大成附録中新編雜集水野忠徳ガ建該

書等彼此ヲ纂考シ姑ク其説ニ據テ本文ヲ記録

ノ是ハ正史ハ勿論其年間ノ軍記物語ヲ始諸家

疑事ノ多キハ前條ニ云フ如シ尚反覆其傳ヲ考

リルニ文久度旧幕府小笠原島開拓再興ノ議起

ト称スル所以ヲ下問ス昇カ島文ニ無人島ヲ小

笠原島ト唱候ハ文禄年中信州深志ノ城至小笠

原民部大輔貞頼伊豆下田ニ至リ始テ此島ヲ見

出シ候ヨリ小笠原島ト唱候ト被存候此文久文

記載スニ見エタレドモ是ハ巽無人島記延寶度

長啓ガ稟状等ニ據リテ記セシト見エ其實ハ空

濠トスルハ大ナル誤リ也是必竟長啓ガ家系ニ

長時ノ嫡男ヲ長頼トシ長頼ノ長男ヲ長元トシ

ノ城主トハ記リ来リシナルベシ此係四ノ載ス

城跡アリ松本ノ城ハ小笠原ノ家人島立七藏ト

云者本九ヲ取建ル其後成就長時ハ深志ノ城ヨ

リ一里許隔テガゴガ真城ニ居ス又林城ト云ヒ

夕霧

テカゴが鼻近所ニ下リ右近大夫貞慶居スト云
ト見エテ長元貞頼ガ居夕リ事ヲ載セス諸國
城全代々記ニハ深志ノ城ヲ移レ始テ當城ヲ築キ
大夫貞永同國井川ノ城ヲ移レ始テ當城ヲ築キ
其子内膳貞政尋テ居リ同七藏貞知マテ三代
ニ居ル大永三年水上宗淳同國仁科ヨリ移リ在
城十一年天文三年小笠原大膳大夫長時同國林
ノ城ヨリ移リ在城二十年同二十二年五月武田
大膳大夫晴信ト同國栢梗テ原ニ戰ヒ利ヲ失ヒ
退城ス其後武田勝頼ノ持城トナリ天正十年ハ
テ甲州ノ番城々々今今年二月織田中將信忠卿甲
斐ニ進軍ノ時木曾左馬頭義昌ガ功ヲ賞シ筑摩
安曇ノ二郡ヲ予ヘ深志ノ城ニ居テシム然ルニ
同六月織田右府公父子明智光秀ガ為ニ弑セテ
八レ給ヒ甲斐信濃又乱ル小笠原右近大夫貞慶討
入テ義昌ヲ追退テ再深志ノ旧城ニ歸父ガ會誓

田ノ駐辱ヲ雪ケリ新テ在城九年同十八年貞慶小
原攻城ノ後豊臣秀吉公ノ意ニ違ヒ本領ヲ没
収セテ年リテ閉營ト崇ハル西岐國羊ノ人吉尾
十者五ノ年閉營ト崇ハル西岐國羊ノ人吉尾
ミラレテ取テ居セテ尾カ藤ノ寄ルニ年キセ此
伐カセテ居セテ尾カ藤ノ寄ルニ年キセ此
事カセテ居セテ尾カ藤ノ寄ルニ年キセ此
白事カセテ居セテ尾カ藤ノ寄ルニ年キセ此
不覺トキ尾ハ聞ヘテ來テ尾カ藤ノ寄ルニ年
仙石トキ尾ハ聞ヘテ來テ尾カ藤ノ寄ルニ年
高名トキ尾ハ聞ヘテ來テ尾カ藤ノ寄ルニ年
川出雲守吉輝居城ス其男全蕃頭三長尋テ此
ニアリ慶長十八年貞慶ガ男兵部大輔秀政居城
マアリ慶長十八年貞慶ガ男兵部大輔秀政居城
城ノ後徳川家ノ所領駿河遠江三河甲斐信濃ノ
五國ヲ轉シ伊豆相模武藏上総下総安房六國

夕霧

今諸料烈書祖開成八蹟洲二據作ル六八國非十封レ尚在京費用
ノ地トシテ石部閑地藏四日市白須賀米野中泉清
見寺等ノ地ヲ与ヘ武藏國江戸城ニ移ラシム因
テ天正十八年八月朔日入城ス然ルニ秀政カ妻
ハ家康ノ長男岡崎三郎信康ノ女ナルヲ以テ懇
情最篤シ在斯内縁アルニ因リ秀吉モ徳川家
對シ寛恕ヲ加ヘ幾程ナク恩免アリシカバ秀政
ヲ家人ノ列ニ置キ所領ノ内下總國葛飾郡古河
ノ城ニ居ラシム是ハ小笠原家徳川氏ノ譜代ト為
ルノ權也然レハ幾程ナク徳川氏兵推テ預リ
天下ニ武將タルハ後累代ノ本領殊ニ一時秀吉
ノ台旨ニ違ヒ父貞慶ガ恢復ノ地ヲ失ヘルヲ憐
レミ松本ノ旧城ニハ復ヘセシ也忠政ハ元和
十五年五月七日攝津國天王寺ノ合戦ニ討死ス年四
十六嫡男信濃守忠脩則家康ノ外孫ニテ其妻

女系

モ美濃守本多忠政カ女ナレハ是モ亦家康ノ外
孫也然ル故ヲ以テ家康ノ寵過他ニ異リ忠脩
モ外祖ノ為ニ忠誠ヲ盡セリ大坂冬陣ノ時父秀
政ハ松本ノ城ニ止リ忠脩大坂ニ向テ再兵起リ
レニ忠脩ハ松本ニ残り秀政出陣スベシト令ア
リシカバ忠脩憤激下知ラ用ヒズ馳上リ五月七
日父ガ手ノ真先ヲカケ多勢ノ中ヘ馳セ入敵陣
ヲ撃破リ馳通リノ散々ニ戦ヒ竟ニ討タレテ
死テゲリ二男右近將監忠真モ父兄ト共ニ戦ヒ
其身數ヶ所ノ重手ヲ負ヒシカドモ敵數多討取
首級ヲ取リ無双ノ名ヲ極メ今年十八歳家康父
子深ク其忠戦ヲ感シ父兄カ戦死ヲ悲ニ兄忠脩
カ子幼稚ホダ襁褓ノ中ニアリ忠真父ガ所領ヲ
知行スベシト懇命アリシカドモ固辞シテ肯セ
ズ尚説諭アリテ許容ナシ忠真止ヲ得ズ命ヲ奉
ジ遺領ヲ継トイヘドモ僅ニ一年ヲ隔テ元和三

小務

年ニ至リ復辞ス幕府其志ノ深切ヲ感シジ其請
フニ任セ從前ノ所領ハ忠脩カ子幸松九ニ与ヘ
忠真ヘハ播磨國明石ヲ與フ今年丹波守松平康
長移リ住メレバ貞頼ガ深志ノ城至テ又ハ論
ヲ端ズ一本小笠原系圖ニ所
載ノ貞頼ガ傳系左ノ如シ

長時 大膳大夫

長頼

民部少輔 初名又次郎 右馬助

長隆

右馬助

長次

曾志守丸 武田晴信養子 右近大夫

貞慶

母若家女房

秀政

從四位 兵部大輔 母若日野中綱言晴之女

長元

信濃守

貞頼

民部少輔 初名彦七

重信

左京 服部家相續 從四位下 信濃守 初兵庫助

長直

長啓

民部後如水 彦五郎

彦七

是則宮内貞任也

長晁

民部又云武部

某

彦七郎

此系圖ハ外務推少録高麗環ハ所藏也 全中ハ附録ニ載ス

朱書ハ貞任以下ノ系統ヲ知ル為ニ追加シテ參考ニ備フ

此系圖ヲ以テ前後ノ年數ヲ推算フレハ未ダ代
數足ラハルニ似メリ其ハ長時ノ長男長頼ガ越
中國外山ニ戰死セシハ永祿九年也其時已ニ長
頼ニ長元貞頼ノ二子アレハ天文ノ羊ヨリ未弘
治及ヒ永祿ノ始マテノ年間ノ生トセンハ論ナ
シ假ニ長頼ガ戰死ノ年長元ヲ十五歳トスル時
ハ天文二十年ノ生ニ當レリ然ルニ長時ガ天文
二十二年深志ヲ去シ頃ハ長元貞頼ノ兄弟ハ俱
ニ上野國ニ遁レ潛匿スト云ヲ以テ考レバ全ク
幼稚ナリトモ聞エズ幼稚ナラガリトスレバ
天文ノ始ヨリ羊迄ノ生ナリトセン故天文十年
ノ生トスル時ハ長元漸ク十三歳貞頼ハ十歳前

後未ダ傳母ノ手ヲ離レザル年齢ナレバ上野
ハ傳母ニ扶ケラレテ潜居タリシニヤ縦哉年齢
ヲ詳ニスル由ナレトモ大約其生レ天文三年始
モ當ルベキ歟姑ク長元が生年ヲ天文三年トス
レバ同廿二年長時が深志ヲ去ル時六廿歳ニ當
レリ其弟貞頼ハ幾年兄ニ後レテ生レタリシマ
其ハ知リ難クレ氏是モ前ノ説ニ據レバ天文ノ
生ナルハ論ナレ天文三年ヨリ貞頼が曾孫宮内
負任ガ家ヲ滅セシ享保廿年迄其年數二百二年
也其ヲ四代ニ配スレバ一代五十年ニ當レリ歴
代共ニ長壽ナリトモ四代ニテハ年數合ヒ難シ
ト云シ歟貞任ハ享保二十年六十六歳ト見エタ
レバ寛文十年ノ生ナルヘレ貞任ガ祖父長直ハ
延宝三年館林ニ死スト嬰無人島記ニ見エ長啓
カ書ニ寛永廿年館林ニ生ルトアルニテ其年歴
推テ知ルニ足レリ華族従五位小笠原忠忱が呈

スル所ノ長頼ノ系圖ニ據レバ長時ハ長男ヲ長
隆トス長隆ハ父長時信州没落ノ時從テ越中國
外山迄至リ討死スト見エ其子又次郎長頼ガ傳
ニ長隆子池田庄右衛門ト云者アリ又次郎後
人名ヲ改メ詳ニ又別十六歳父長隆ニ從ヒ越中國外
山ノ軍場ニ趣キ向面ニ疵ヲ被リ父戦死スル
後信州古諸ニ浪居ス寛永七年二月右近將監忠
真播磨國明石在城ノ時招テ山下勘左衛門ニ附
レ假ニ其家ニ居レリ然ルニ明石到着ノ後病ニ
罹リ僅ニ三十日許ニシテ同三月九日死享年六十
五歳長頼ニ子ナクシテ其跡断絶ストアルヲ對
照スレバ大ニ矛盾ニ忠忱カ呈進ノ系圖ハ末ニ
寫シ載セテ参考ニ供フ翼無人島記ニ長元ニハ
播河泉ニテ十二万石ノ地ヲ年一負頼ニハ三遠
播ニテ四万七千石ヲ與ヘ播州室ニ居ラシム長
元卒後貞頼西家ノ地ヲ合ヒ十六万七千石ヲ領

夕霧

ス然ルニ秀吉難事ヲ播ヘ十六万石ヲ没収シ七
千石ヲ与フ負頼速懐ニ退クト記セシハ享保度
負任ガ稟状ノ趣ト太ク相異リ今何レヲ實トシ
何レヲ否トセシ考證ナシ岑相記新岑相記播磨
國名所巡覽記室津追考記等ヲ合セ考フルニ室
山ノ城ハ元曆中小次郎室重範初テ于此居其後
輅ク中絶元弘年間則村入道赤松同心再ヒ築キ
其臣掃部助本郷直頼雅楽助赤松則頼等ヲシテ
衛ラシム後年全ク赤松家ノ番城トナリ浦上則
宗其子村宗其子政宗マテ三代相續ス政宗カ時
永祿九年正月十一日赤松政秀政宗ヲ怨ムル事
アリテ不意ニ襲テ討亡シ其跡荒廢ノ地トナリ
レテ寛永中下総守松平忠明同國姫路ノ城ニ移
轉ノ後室山ノ城跡ニ番卒ノ見張所ヲ置キ難船
救助ノ備トストアリテ負頼ガ事ヲ載セズ又負
頼一度所領ヲ減シテカドモ再五万石ヲ与

一攝州三田ニ居テ見ユ示覺來ナシ
諸國領主代々記ヲ閱ルニ三田ハ天正年中左馬
允山崎家盛ニ與テ天正十八年中務大輔有馬則
頼其男玄蕃頭豊氏尋テ居城シ元和七年丹波守
松平康長移リ居ルト記シ藩翰譜ニハ家盛ハ志
摩守片家が男也始近江國犬上郡山崎ノ地頭ニ
テ宗家佐々木ガ被管ト為リ片家カ時一族後藤
但馬守ヲ左衛門督義弼カ為ニ殺サル片家コレ
ヲ恨ミ巴ガ山崎ノ城ニ楯籠リシニ信長當國ニ
向テト聞エシカバ頼テ信長ノ手ニ参リ属從テ
家盛モ父ニ續キ信長秀吉ニ隨ヒ仕ヘシカバ攝
津國三田ノ城ヲ与ヘ所領ニ百石ヲ宛行テ慶長
五年東西ノ軍一時ニ起リシ時其身ハ大阪ニ在
リテガテ東國ニ味方ス徳川内府父子其志ヲ感
賞シ備中國成羽ノ城ヲ与ヘテ原要ト見エタ
リ今案ニ信長美濃尾張ノ兵ヲ帥テ近江國ニ進

小霧

三入箕作和田ノ西城ヲ攻落シ佐々木ガ本城觀
音寺ニ迫ル兼禎義弼ノ父子防戦ノ術計盡キ城
ヲ棄テ逃レ去リシハ永禄十一年九月ノ事也然
レハ片家ニ三田ヲ与ヘシハ元龜ヨリ天正ノ始
ノ年間トテ事明也然ルニ諸國領主代々記主
合結等ニ太ク違フリト雖モ何レノ書ニ據リテ
モ貞頼ガ此地ニ移リ任ムベキ空間ナシ加之最
初信長ニ羅遇セラレ播州室ニ居ラシメ無故所
領ヲ減シ後家康ガ吹峯ニ因テ新ニ所領ヲ與ヘ
三田ニ居ラシム斯テ後元和元年他家相續ノ兄
服部左京重信ガ大坂方ニ属シ籠城セシヲ憎ミ
弟長直ハ関東ニ属シ戦功アルヲモ顧ズ其所領
三田既ニ享保度責任ガ返答ノ稟状ニモ飯山ノ似
タリ既ニ享保度責任ガ返答ノ稟状ニモ飯山ノ似
事而已アリテ三田ノ事ヲ載セズ巽無人島記ニ
此事ヲ記載ス下雖モ此書モ其家傳ニ依テ記セ

夕霧

ル書ニテ悉ク信ズベキニモアラズ總テ諸書ヲ
照準シテ貞頼長直等ガ事蹟ヲ檢考スルニ巽無
人島記其他ハ延室ノ長啓カ稟状享保ノ責任ガ
返答書ニ所見ノミニテ對照スベキ書類ナケレ
バ考訂ノ目的ナシ華族從五位小笠原忠忱旧豊
城主會小笠原家ノ正嫡タルニ因リ同家ノ家傳
ヲ外務権少録高麗環ヲシテ審問サセシムルニ
貞頼ガ小傳確ニ記録スルモノナレトテ笠原大
成附録新編雜集無人島記三田四郎左衛門中山
羊太夫覚書大坂瓦町人佃沼兵衛覚昏小笠原氏
部記同宮内記右近大夫貞慶譜等ノ數本ヲ進出
ス其書彼此ヲ點檢スルニ享保ノ度貞頼ガ曾孫
宮内貞任ヲ糾問セシニ同人所藏ノ小笠原系圖
ニハ長時ノ長男ヲ長頼ニ作レ氏宗家傳來ノ系
圖ニハ長時ノ長男ハ右馬助長隆ニテ母ハ仁科
入道道外ガ女越中國外山ニ討死ス其男右馬助

夕霧

長頼ニ男子ナク系統此ニ断絶ノ記曰記ニ判然
タリト忠忱ガ家杖大森政方杉山久悠等ガ追々
ノ稟状ニ見エ負頼ハ忠忱ガ家統ナラズレテ全
ク別派ナル記ハ宮内記ニ詳ナレバ共ニ謄寫レ
テ巻尾ニ附レ参考ノ一ニ備フ在新ハ負頼ハ何
レノ分派ニシテ詳ニスルニ野田ニシテ推考アル
小笠原島ノ事ヲ記レタルモノハ僉ク深志ノ
小笠原ナル記ニ作レド其ハ巽無人島記小笠原
民部記同宮内記等ノ誤ヲ傳ヘレモノナレハ確
證トハナシ難シ抑小笠原ハ其始甲斐ニ起リ信
濃ニ移リ深志松尾ノ両小笠原ヲ始若狭阿波ノ
小笠原赤澤ノ小笠原三河國幡豆ノ小笠原遠江ノ
國高天神ノ小笠原等數派ニ別レ中ニ深志ヲ同
族ノ嫡々トス若狭ノ小笠原ハ柳營ニ昵近シ常
ニ京師ニ在ルヲ以テ世俗是ヲ京都小笠原ト称
ス三河小笠原家ヲ考フルニ信濃守長清ノ男阿

外務省

波ノ弥太郎長経其二男伴野六郎時長ガ二男出
羽守時直其男出羽守長恭其男次郎盛時其男藏
人恭房弘安八年十一月城入道鏡倉ニ於テ追討
ヲ領幡豆ニ居住ス因テ三河小笠原トモ幡豆ノ
小笠原共云フ是三河遠江ノ小笠原ノ祖也又信
濃小笠原ハ長経長男信濃守長忠其男信濃守長
氏其男信濃守宗長其男信濃守貞宗々時將軍足
利尊氏貞宗ガ弓馬ノ故實ヲ知ルヲ以テ永ク弓
馬ノ師範タルベキ記ヲ騎射秘抄ニ添書ヲ加ヘ
小笠原ノ総領ト為ス是信濃ノ小笠原ナリ世ノ
人誤テ遠州三州ノ小笠原ヲ信州ノ門類トスル
ハ三州ノ系図分明ナラザル故也ト記セバ同族
ナガテ全ク信濃ノ分流ニハ非ズ然ルニ高天
小笠原家譜ヲ閲スルニ信濃守長高ハ信州深志
ノ任修理大夫貞朝ノ長子也ト記シ同系図ニ長

小笠原

夕務

高父異腹ノ二男長棟ヲ愛シ長高ト暱カテズ因
テ信州立退今川家ニ属シ遠州馬伏塚ニ居ル其
男左京進春儀カ時高天神ニ移リ其弟又次郎某
ヲ三州幡豆ニ置ト見エタレバ三河小笠原ノ家
記ト大ニ牙楯ス如此傳説紛紜且日夏繁高カ武
藝小傳ニ宮内大輔小笠原氏隆ハ同姓大膳大夫
頼氏ニ從テ箕裘ノ藝ヲ継クト見エ又若狭守長
政ハ信濃國川中島ノ藝ヲ父遠江守入道心宗正
鉄ハ天文弘治ノ人ニシテ子馬ノ達人也其子出
雲守頼定入道休庵ハ右近大夫貞慶ニ從テ長時
ノ傳書ヲ得其子長政守小笠原系道長ハ阿載ハ別信濃
ハ戰記考正ニ小笠原若狭守長詮等ノ名アル者
ハ僉長清ノ末葉ナルハ勿論ナレドモ系統何レ
ノ分派ナリヤ小笠原系圖同異本寛永系圖松尾
小笠原赤澤小笠原若狭小笠原阿波小笠原高天

神小笠原大井小笠原民部等ノ系圖教本ヲ以テ
参考スルニ氏隆頼氏頼定長政長詮等ノ名ヲ載
スルモ武田信濃ノ小笠原美濃ノ土岐近江ノ佐
甲斐ノ河ノ今川等ハ其時代ノ豪族ニテ分派支
流モ勘カテハ後世其家傳ヲ別ニシテ分派支
テ誤ルモ有ルニ已ニ小笠原藤助光政ヲ新井
白石ガ紳書ニハ小笠原秀政ノ二男林藤助光政
ト記セドモ林家傳ニハ大膳大夫清宗ガ三男光
政足利持氏在世ノ頃數年鎌倉ニ暱近ス傍輩光
政ヲ諷スルニヨリ冤罪ノ為ニ所領ヲ失ヒ浪々
ノ身トナリ称号ヲ父カ在城ノ地名ニ因リ林ト
改メ信州ノ山家ニ整スト見エ小笠原系圖ニハ
清宗ガ二男ハ西條七郎ニ作リ三男ハ見エズ如
レ此傳説區々何ヲ可トシ何ヲ否トスルノ確證ナ
レ是モ則同日ノ談ニテ獨負頼ガ系統而已ニ非

小笠原

夕務

不却說永祿七年長元父子德川家招因三
河至扶助受ケレ記セドモ是モ示其
時代之正史ニ所見ナレ本村高教ガ武德編年集
成永祿七年四月七日ノ茶ニ小笠原新九郎安元
並ニ同姓右馬助長隆喜三郎貞慶後右近大左衛
門重廣始ニ拜謁ス安元事ニ冬州幡豆郡幡豆ノ
郷安堵スヘキ旨御神文ノ印章ヲ拜受ス此長隆
貞慶ハ信州深志ノ大膳大夫長時ガ子ニテ信州
安遊客ノ氏一奉リ向婚十月長隆中上杉謙信
ヲ安遊客ノ氏一奉リ向婚十月長隆中上杉謙信
吉江織部信且氏一奉リ向婚十月長隆中上杉謙信
借信中政房守長ル俊部同將中務景宗
ト見工大正八死ス越同書元龜二年二月二十五日
中茶信玄進ガ從士相田又兵衛伊野沼部右衛
彦七郎貞頼ガ從士相田又兵衛伊野沼部右衛
濱松ノ進ガ從士相田又兵衛伊野沼部右衛

十川然レ氏前ニ云フ永祿七年三河ニ至リニ事
ハ長隆貞慶重廣ノミテ其餘ハ安元ノ一人也
成島新九郎康元始テ歸順シ拜謁シケレハ幡
豆郡ノ旧邑ヲ賜テ是ハ四月ノ事也トアリテ長
隆貞慶ガ事ヲ載セズ殊ニ貞頼父子ガ事蹟ヲ詳
ニセカレハ是モ亦詳ニスルニ考證スルモノ無
レ諸家系圖纂小笠原系圖ノ中ニ所載ノ小笠原
民部系圖ハ附録ニ修ムル異本小笠原系圖ト大
同小異大膳大夫長時ニ三男二女アリ長男長頼
二男長隆次ニ女子二人其次三男貞慶也長頼ガ
男ヲ信濃守長元其子民部大輔貞頼マテヲ載セ
其書ノ奥ニ此長元貞頼父子ハ信長公秀吉公家
康公從御三家御感狀御證文敷通被成下當民部
迄相傳仕候ト記シテアルヲ以テ考フレハ此系圖
ハ延宝三年八月民部長直ガ旧臣等渡島怒訴ノ

小笠原

時附シテ進出シタリシ系図ナルベシ此書ニ所
載ノ系図負頼父子ヲ長時ノ子孫トスルハ享保
度宮内負任ヲ糾問ノ時其誤リナルヲ判然ニス
因テ深志ノ小笠原黨ナラヌハ勿論ナレドモ諸
國ニ分沁シタル小笠原ノ後裔ナレシカ總テ負
頼ガ初テ南海渡島ヲ記録スルモ其説一ナラ
ズ朝鮮歸陣ノ時航ルト云ヒ又ハ伊豆ノ下田ヨ
リ渡島ストモアリテ何レヲ正説トスル證據モ
ナシ只僅ニ前ニ奉ルトコロノ書類ノミ世ニ存
レ其他ニ見ルベキモノ無レバナリ次ニ載スル
寛文九年阿波ノ國ノ漂民等ガ歸リテ稟上ノ書
ヨリ以後延宝三年長崎人島谷市左衛門ガ覺書
ヲ始追々ノ漂民等ガ稟狀當時其者ノ談話ヲ筆
記セシモノモアレバ次々ニ據ルトコロノ書籍
モ少ナカラキト其最初ヲ詳細スル事ヲ得ハル
ハ隔靴ノ心地シテ遺憾ニ堪エズ他日考證ヲ得

夕
務
書

本改メ正シテ全
再云宮崎成身カ國字分類雜記無人島ノ条ニ
人見私記ヲ引テ延宝三乙卯年六月廿八日八
丈島ヨリ巽ノ方洋中ニ島有之人倫不佳珍木
奇鳥等有之旨先年紀州商船漂着彼島ニ有之
旨甲候ニ因テ去年五月仰伊奈兵右衛門唐船
造リノ船差渡シ頃日帰帆珍木奇鳥其外色々
珍物持參今日献之ト而已アリテ負頼ガ文祿
以後寛永年々テ渡島ノ事ヲ記サズ人見私記
ハ友元節ガ手記ナリ節ハ林羅山ノ門人ニテ
文祿慶長ヨリ以後元和寛永年間マテノ事迹
ハ見モシ聞モシタリケシテ毫末モ其事ヲ云
ハズ紀州ノ商船ト記シタルハ阿波國浅川浦
ノ船ニテ只紀州國産ノ蜜柑ヲ積タルヲ誤テ
紀州船トハ記セシナルベシ此誤ハ二之卷延

夕
務
書

室巡視ノ条ニ詳ナレハ併セ見テ其誤ヲ察ス
ベシ其ハ有左之有右之其時代ニ負頼ガ事迹
詳ニ傳ハラガリシニマ前ニモ云フ如ク同人
ガ事迹其年代ノ正史ハ勿論野史軍記等ニモ
所見ナク僅ニ武徳編年集成中ニ小笠原彦七
負頼ノ名ハ見エタレドモ同書文禄年間ノ條
ニ小笠原島渡航ノ事ヲ載セズ諸家系圖纂中
ニ所載ノ小笠原氏部系圖ト云ヘルモハ延
宝三年八月民部長直ガ渡島惴願ノ時進出
日記ト共呈セシ家系ニハアラズヤ從レ此
系圖モ民部大輔長宗其子大膳大夫長時其長
男民部大輔長頼其子信濃守長元其子民部大
輔負頼ト記レ此長元負頼父子ハ信長公秀吉
公家康公從御三家御感狀御證文數通被成下
本當民部迄相傳仕候ト記レタレドモ長時ガ男
三長頼無キノ説ハ前ニ云フ如シ總テ負頼カ

夕
務
書

事迹ヲ詳ニセズ然ルニ源忠彦ガ編撰スル所
ノ野史忠彦ハ有栖川宮ノ家士也嘉永年中野
松天皇曰本朝仁孝天皇ヲ為セリノ記也本傳アリ列傳アリ
編體裁大皇曰本朝仁孝天皇ヲ為セリノ記也本傳アリ列傳アリ
笠原長時ガ傳ニ長時長子長隆稱右馬助次負
次初為僧還俗又稱右馬助次負慶次長頼稱上
總介ト見エタレドモ忠忱ガ家ヨリ進出ノ系
圖ニハ長頼ハ長隆カ男ニ作リ初又次郎右馬
助ト見エ諸家系圖纂ニ所載ノ小笠原系圖モ
長時ノ子長隆負次負慶三人ニテ長頼ヲ載
セズ同書異本小笠原系圖三本ヲ並ニ載セタ
レドモ倉長時ノ子前ノ三人ノミヨリ長頼ヲ
載セガルフ以テ考フレバ野史ニ長頼ヲ加ヘ
四子ニ作リレハ何レノ系圖ニ據リレニヤ系
圖纂中ニ所載ノ小笠原氏部系圖ト附録ニ所
載ノ異本小笠原系圖ノ二本ニハ長時ノ長男

夕
務
書

長頼 作レドモ野史ノ趣ニ相反シ長未相
 異ルミナラズ此系四二本ノ内民部系四
 三子トシ異本ハ四子トセシハ前ニ所載ノ系
 四ノ如シ長頼ノ名ハ野史及此ニ云民部系四
 異本小笠原系四忠忱ガ進出ノ系四等ニ見エ
 タレドモ或ハ長時ガ子ニ作り或ハ長時ノ孫
 ニ作りテ何ヲ正シトスルニ確證ナシ其異同
 参考ノ為民部系四及忠忱ガ進出ノ系四トモ
 三抄録シテ左ニ載ヌ前ニ所載ノ高麗本小笠
 原系四ト對照シテ其異同ヲ知ル心シ又曰野
 史長時ガ傳ハ未ニ掃部助信嶺ト八郎長忠監
 物吉次ガ傳ハ載セタレドモ長頼長元貞頼等
 ノ傳ヲ載セズ是ハ其傳日記
 人野見詳ナラネハ十九ルヘシ

○從五位小笠原忠忱家系抄録

自新羅三郎義光二十代
長時

長隆

小笠原又次郎

右馬助

於越中外山討死

貞次

武田晴信養子為子後名小笠原
右馬助有故害於信州松本

貞慶

本位松本小笠原家正統

長頼

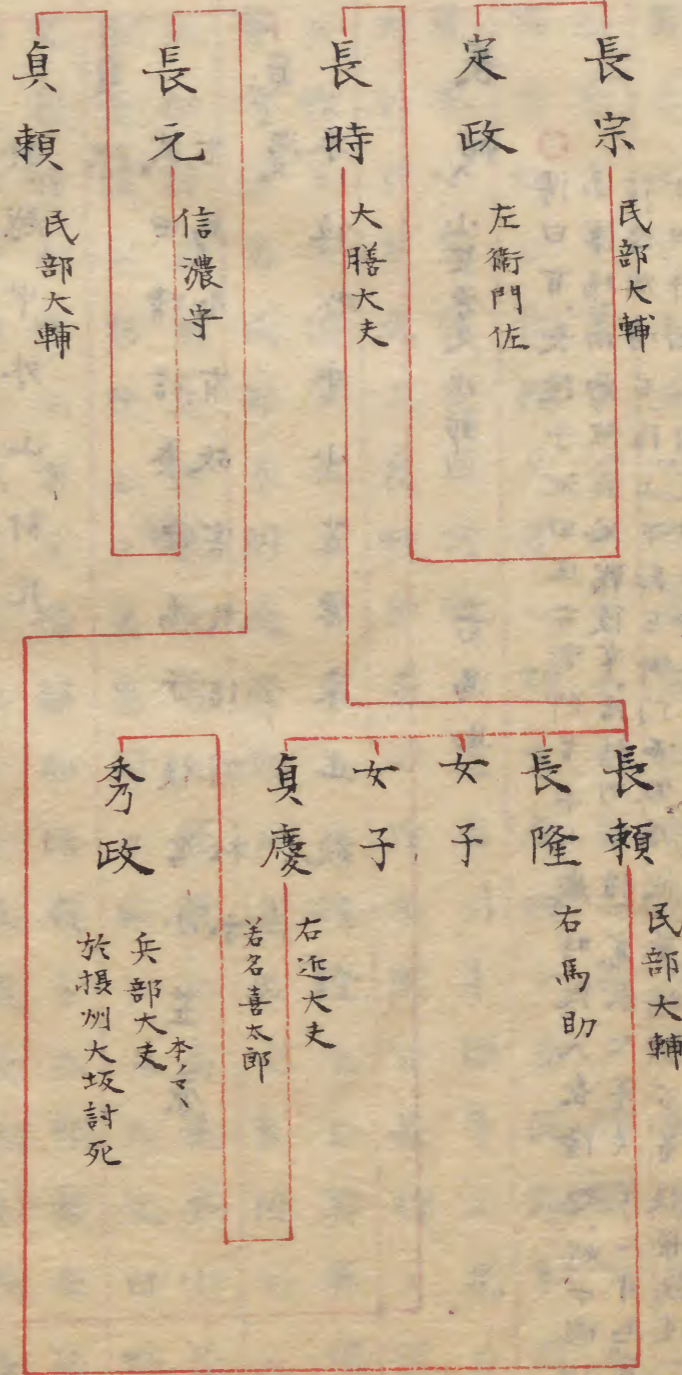
小笠原又次郎

右馬助

○傳曰有長隆子池田庄右衛門者十六歲時從父長隆趣中國外
 山軍場向被一疾父戰後宰居信州古諸寬永七年庚午二月忠真
 拓播州明石附山下勅左衛門而假居彼家時明石著後罹病僅三
 十日許回三月九日卒時年六十五歲
 右長頼子息無之跡相絶候段別記有之候貞頼ハ長頼之弟ニテ候ヤ記録相見不申候

小笠原

○諸家系圖纂中民部系圖抄録



此長元真賴父子ハ信長公秀吉公家康公從御三家御感狀御證文數
通被成下當民部迄相傳仕候

又云巽無人島記長元信濃國飯山ノ城ニ居リ後
上野國ニ潛居スト見エタルハ天文二十二年以
前ノ事ナルベケレドモ未タ證トスベキ所見ナ
シ飯山ハ信濃國水内郡也巽無人島記ノ説ニ據
リテ始長元ガ居城トスル時ハ長元カ落去ノ後
廢城ナリケニヲ天正五年中納言上杉景勝信濃
國埴科高井更級水内ノ四郡ヲ略シ飯山ニモ新
ニ築城セシナルベシ諸國城主代々記ニ天正五
年上杉景勝築之家臣代而守之ト見エ管窺武鑑
天正十年ノ條ニ飯山ヲ越後家岩井備中守ニ被
下之トアレバ天正十年ハ番城ヲ備中守ガ居城
ニ與ヘシト聞ユレドモ其後文祿年中右近大夫
森忠政ガ移住セシマテ備中守居タリシヤ詳ニ
セズ是等ヲ以テ考フレバ天正五年ヨリ以前廢
城ナリシハ勿論ナレドモ天文ノ年間長元カ居
城ノ有無ヲ記スモノナケレバ其ヲ確ニスルニ

小野

所由ナシ異無人島記一ニ云異無人島覺書ハ是
モ亦宮内貞任ガ筆記ナルベシト覺シク最疑シ
キ件少カラズ殊ニ其中長元貞頼ノ傳ニ至テハ
同二十年同人ガ右近將監忠晴ヲ以テ糾問ノ答
書ニハ撰州飯山トノ記シテ信州飯山ヲ記サ
ズ西書ニ所記太ク矛盾スルニ似タリ鎌倉大双
紙拾遺ニ上野國ニ疾ク小笠原黨ノ居タリト記
セシ異無人島記ニ貞頼父子ガ尋テ上州ニ在リ
シト云ヘルヲ合セ考フレバ恐ラクハ貞頼モ上
野土着ノ小笠原黨ノ余類ナルヲ一向ニ小笠原
家ハ其鼻祖甲斐ニ起リ氏族信濃ノミ非ズ甲斐
ニ残り諸國ニ分派シタリシモアリケン然レモ
戰國ノ風習父子兄弟別レテ互ニ敵トナリ遂ニ
親戚ノ交ヲ漸ニ至ルモ少カラズ況ヤ本末ノ間
ニ於テヲヤ然レバ貞頼カ家モ然ル類ニテ疾ク
上州ニ別派ヲ為シ居タリシナラン歟

夕
務
者

靈元天皇ノ寛文九年

清康熙八年
洋千六百六十九年

十月二十八日

阿波國海部郡淺川浦勘左衛門十一端帆ノ手船
ニ乘リ同浦ノ水主安兵衛彦之丞三右衛門等ヲ
乘リ組セ即日出帆シテ紀伊國宮崎ニ着船シ同
國藤代ノ高夫長右衛門ガ江府ニ販賣スルトコ
ロノ紀國産物ノ蜜柑ヲ積載セ荷主ヲ始メ一船
七人乗ニテ同十一月十五日早晨宮崎ヲ出帆シ
伊勢國アリ浦ニテ疾風シ數日滯泊同十二月

夕
務
者

夕霧

六日三至り順風ヲ疾チ得潮時ヲ因リ航海セシ
ト船ヲ出ス于時一朶ノ黒雲起リ暴風、為ニ忽
大洋ニ流レ逆波ニ漂フ事七十余日同十年
百七十年六月二十日遙ノ洋中ニ一ツノ島アル
ニ漂ヒ着キレニ海岸ノ岩壁高ク輒ク登ルヘキ
ナラネハ左ト右トスル間ニ船ハ巖ニ當リ破損
レテ冷道ヲ開キ已ニ沉没セシト人々周章飛
移リ危急ヲ端船ニ免ル斯テ本船ヲ繫キトメ辛

フレテ島上ニ登リ人家ヲ尋レドモ住人アル躰
トモ覺エズ船中水盡渴甚シク水ヤアルト索メ
歩クニ一條ノ流水アレハ各飽マテニ飲ニ渴ヲ
止メ其夜ハ其儘ニ卧レ翌朝起立ニ勘左衛門一
人尚熟睡ノ躰也兼テハ人ニ先ダチ起キ出ルニ
珍テレク朝寝スル事ヨト暫クハ起レモヤラザ
リレガ餘リノ事ト揺リ起セドモ何ノ返答モナ
ケレバ是ハ怪シト克々見ルニ豈計乎息絶テ冥

夕霧

土ノ客ト為レリ人々驚キ騷ゲトモ獲生^{ヨミカヘル}ベキ客
躰ナラネバ方術^{ケンズベ}ナク近キ所ニ埋葬レ一塊ノ墳
墓ヲ築キ心許ノ吊ヲ營ミ先ツ島中ノ分野ヲ見
シト人々同佯徘徊スルニ磯際ニ一介ノ龜ノ上
リ居タルヲ見忽チ捉獲テ本ノ所ニ携帰リ潮煮
ト為シ飢ヲ養フ數十日漂流ノ疲勞各一時ニ覺
十日許ノ間ハ只三食シテ憩息スルノニ既ニ旧
臘十八日マデニ飯米盡キ正月二十一日マテ六

蜜柑ヲ食テ飢ヲ凌ギ此日初テ九万匹ニ喉ヲ釣
リ獲レラ食トス其後青魚ノ三尋許ナルヲ捉リ
切乾ト為シ些宛之ヲ食シテ空腹ノ補トス食物
ノミナラズ水又盡テ頗ル渴ニ困シ潮ヲ汲テ
咽ヲ湿润シ其患苦言シ方ナレ一夜二更トモ覺
レキ頃小雨アリ端船ニ請ケ溜レ水凡三分是ヲ
些呑ムニ甘露ノ如シ如此飢渴ニ苦ミシヲ以テ
着島ノ上勘左衛門モ心弛ミ死セシニヤト今六

十
路
首

夕
暮
岩

各我身ニ比ベ心細サノ限ヲ盡シ休息ノ間モ毎
日亀ヲ捉テ食セシ故カ各精カモトカヘリ端
船ニ乘リ六人一同シテ島ノ周圍ヲ巡リ見ルニ
周圍凡十里山ノ高サ伊豆ノ大島ヨリ漸高シ船
入ノ港トモ為スベキ海灣一个所方位西南ニ向
ヒ其灣ノ廣サ三町程船ヲ繫ガバ二三十隻ハ狭
シトスベキアラザルヘシ海底ノ浅深ヲ測ルニ
干潮ニ尋許滿潮四尋ニ至ラシカ其灣ノ向フ一

里許ヲ隔小島三ツ並列ス總テ全島水ハ潤澤流
川一條其幅二三間小石アリテ浅瀬也山中蘇鉄
椶招椰子レハハク榦菜イッ磯苦ト櫛ビ榔椰等殊ニ多ク中ニモ椶
栝ハ大木アリテ根本一抱長サ二三十尋モヤア
ラントオホ覚シク小ナルモ周圍一尺四五寸其他草
木繁茂ス海岸ハ魚介群游其中ニモ鱒魚ナカシ鰻魚ウナギ
鮓モ鰕エビ龜ノ類最モ多シ珍シキハ鮓ト鰕ノ二種共
ニ長サ三尺餘鼈モ大小群テ海上ニ浮ベリ二三

水務

夕務

月ノ頃鯨魚甚多ク吹潮一日幾度ナルヲ知ラズ
其餘磯魚數十種或ハ目馴目或ハ未目目ノモノモ數
多ニテ岸ニ附ケルヨシカサ蟻ハ其形恰モ大ナル鮑ニ似
タリ島上ノ山林ニハ鶯イハツクミ岩鶯山鳩鳥殊ニ群レテ
集ルハ其形五位鷺ニ似テ羽色柿染ノ如クナル
鳥又雞ノ雌ニ似テ頭赤ク其外總羽黑色嘴足共
ニ赤ク形宛然鷗ノ如クナル鳥アルノニ此時長
サ四尋程ニテ厚サ五寸許ノ楠板一枚流レ来ル

ヲ拾ヒ上テ端船ニ載セ持帰レリ其板幅九三尺
板此島古ヘヨリ住居セシ人モナカリケン此所
ゾ人ノ住居ナリケント覺レキ跡カニ見エヌ斯
テ各本ノ所ニ帰り集寄クヒ此儘在島レテ島鬼トナ
ラシヨリ運ヲ天ニ任セ再ビ帰船ノ方嚮ヲ立ベ
レト商量シ前ニ来リ来リシ本船モ遂ニ碇綱ヲ
摺り切り岸ニアタリ巖ニ碎レ濱邊ニ流レ寄り
レヲ拾ヒ取り最前拾ヒ獲レ楠板ヲ船橋ト為シ

舟務

夕霧

夕霧

破船ノ板木ヲ集メ日敷五十一日余ニシテ四枚程
ノ船落成ス固ヨリ釘ノ蓄ナケレハ本船ノ古釘
ヲ板鋸ヲ取り只堅牢ヲ專要ニ造り立シカバ小
船ナガラ波除ヲモ十分ニ設ケ烈風激波ノ豫備
ヲ為シ器械船具ハ本船ノ残物ヲ用ヒ航海中ノ
食料ハ彼五位鷺ニ似タル鳥今按ニ信天翁ナリ
此鳥方今モ島中ニ
群栖スル事ハ次々ニ詳ナリヲ手捉ニシ在島中ハ潮藁ニ調理
シ三食ニ用ヒ鰲ヲモ捉リテ共ニ食シ其他大小

ノ魚類食用ノ餘残ヲ悉ク乾物ト為シ全ク準備
調ヒシカバ今ハ心安シト薪水ヲ積入日和ヲ待開
船ヲ用意ス此島ヨリ西北ニ當リテ晴天ノ日ハ
遠山見ユ先ツ其山ヲ志シ四月九日ノ曉天海上
平穩盆水ノ如クナレハ天神地祇ニ海上平安無
事ニ帰國セン事ヲ各一心ニ祈念シ次ニ勘左衛
門ガ墳墓ニ至リ故郷ニ帰船ノ事ヲ告ケ妻子ノ
向後ヲ執念スベカラズ何レモ帰郷ノ後ハ力ヲ

夕霧

添へ安カラシムべし南無幽靈頓生菩提ト其靈
魂ヲ慰メ別レシトスレバ懐旧ノ海神ヲ濕レ名
残モ流石ニ盡難ケレト互ニ心ヲ勵マシ墓地ヲ
立去海濱ニ歸リ今ハ是迄ナリト繫キレ纜ヲ解
艦ヲ西北ニ向ケ彼遠方ニ見ユル島山ヲ志シ早
朝ニ出船シ其夜半許ニ着船ス來来リシ海路十
二三里ト覺^ルシク此島山最前漂着ノ島ニ高サ相
異ラズ魚鳥草木僉ク相同シ只一種周回二尺ニ

餘リ高サ十二三尋ト覺シキ木アリテ其葉茗荷
ニ髣髴タリ此木最前ノ島ニモアレト此島殊ニ
多ク且長大也二本伐採テ船ニ積載ス最前滞在
ノ島モ此島モ山溪ヨリ流水川ヲ為セバ水利最^モ
ヨシ耕地ト為スベキ地或ハ二町四方或ハ一町
四方其餘大小ノ平地數ヶ所アリ總テ最前ニ在
リシ島ノ近傍大小ノ島嶼並ニ在ルニ耕地ト為
スベキ些ノ地アルモアレドモ多クハ巖石岨々

トレテ樹木ハ無キ地アリテ然ル島々ハ水利
モ随テ不便也其中ニ伊豆ノ大島ニ大小相對ヘ
ル島三ツ此島々ハ共ニ小流アリ又一二三里ノ
周圍ワケリナル小島十四五此島々ハ船ヲ繫クベキ小
灣モナク全島ノ高サ前ハ三島ノ三分ノ一些ノ
小流アレバ水ハ全ク無キニ非ズ是等ノ島ハ樹
木森々ト生茂レリ却説初日着船ノ島モ住人無
ケレハ其海岸ニ五六日滯泊シテ早朝出船南風

夕霧

ニ艇リ其翌朝又一ツノ島ニ着船ス昨日出レ島
ヨリ此島迄ノ海路凡二十二三里島ノ廣サ前ノ
島ヨリ狹隘山モ低レ西島共ニ海湾ナク船繫キ
置ベキ海湾モナレ最初出レ島ヨリ此島マデノ
アハヒ小島ノ並ヒ在ル事二十許各住民アル程
ノ地トモトモ見エズ叔二度目繫泊ノ島根ニ二日滯
留三日目ノ早晨出帆西北ノ間ハ楫ヲ取りシニ
折節疾風吹来リ或ハ順風オヒ或ハ披斜ヒキ昼夜艇リハ

夕霧

日目ニ一ツノ島ニ着船ス是則八丈島ニテ人々
獲生ノ心地ヲ為セリ島人ニ本^{コノ}日^ヒヲ向ヘハ卯月
二十五日也ト答フ今日ヨリ前ニ日數ヲ繰返シ
算^{カッ}フレバ漂着ノ島ヲ出レハ本月ノ九日ナリシ
ヲ知ル彼島ト八丈トノ氣候^{クワイ}太ク相異リ彼島ノ
二月ハ阿州邊ノ五月比ノ暖氣三月ハ六月比ノ
暑氣ヲ覺エ四月ニ至リ弥々熱強ク石上燒ケ素
足ニテフム事ヲ得ザリシガ今八丈ニ来レバ良

夕
務
簿

阿州ノ氣候ニ相似タリ彼島暑氣強クテ以テ蠅
蚊共ニ昼ノ内ニ群^ムレ集^ルレ夜ハ反テ出ル事少シ
八丈ニ来リテ南洋中ノ暖氣ヲ思ヒ出彼島ニテ
ハ裸體ニテ在リレカドモ此地ニ至リ赤ダ草ノ
衣ヲ脱スル事ヲ得ズ彼島ヲ出レヨリ八丈ニ来
ルマテノ船路ニ皇國ノ船ヲ始外國ノ船ヲ見ズ
斯テアルベキナラネバ島吏ニ漂流ノ顛末今當^{コト}
島^ニ着船マテヲ訴告ス島吏及肝煎六村ノ里正

夕
務
簿

等其患難ヲ恤レニ搗麥一斗、二升ヲ施シ与ヘ此
時彼南洋ノ島ニテ伐採来リシ梭栲、木一本ヲ
島吏ノ所望ニ任セ贈リ與ヘ伊豆ノ地方ニ航ラ
シ事ヲ請フ島吏承諾下田ヘノ渡海ヲ許容シ出
船ヲ周旋ス八丈ニ滞留九日五月五日船ヲ出シ
同七日亭午ノ頃伊豆國洲崎浦ニ着船ス浦民下
田ノ海関ヘ訴フ事ニト忠告スルニ隨ヒ陸地ヲ
經テ下田ニ至リ海関ニ本國ヲ出シヨリ此地ニ

夕
務
目

来ルマテノ顛末ヲ訴フ此時奉行今村傳四郎正
長在勤中ニテ委細聞届ケ其船ヲ下田ニ乘廻ス
ベシト指揮ス漂民等洲崎浦ニ歸リ三日ノ後船
ヲ乘廻シ下田ニ入港シ着船ノ旨ヲ訴フ属吏出
張船中ヲ検査シ正長ニ告ク其躰怪シキ事モナ
ケレバ許シテ洲崎ニ乘歸ラシム漂民等船ヲ乘
歸リ洲崎人ニ商量シ沽却シテ陸地ヲ行各領主
ノ江戸邸ニ至ル下田奉行及八丈島吏ヨリ漂民

夕
務
目

夕
務
簿

申稟ノ件々ヲ注進ス其上陳而已ニテハ未ダ詳
細ナラザリケン漂民等ヲ徴出シ尚島中ノ分野
ヲ委曲審問スベシト紀伊ノ漂民長左衛門ハ其
國主中納言徳川光貞ノ家士ニ令シテ差出サセ
阿波ノ漂民安兵衛彦之丞三右衛門ヲ三人ハ其
國主蜂須賀千松丸ニ本年十一月二十七日柳堂中
字ヲ与ヘ細通ト称シ從四位下ニ叙シ阿波守ニ
任ス武家ノ官位五位ヲ越階シテ四位ニ叙セラ
ルハ非ズ同日從五位下ヨリ階シ一位ニ從四位
位下ニ昇進シ此等級ニ至ルト雖モ位記口宣案

ハ從五位下ノ初級ヨリ從四位ガ家士ニ令シテ
下ニ至ルマテヲ授ケラル也
差出サセ俱ニ八月十日一席ニ徴出シ各生國ヲ
出シヨリ漂流ノ顛末及南洋中漂着ノ離島其全
島ノ廣狹山嶺ノ高低草木ノ生否耕地ノ有無澗
川ノ水利海灣ノ浅深禽獸魚介ノ多寡ヲ始其島
近傍ナル大小諸島ノ目撃脱漏ナク問ヒ紀ノ漂
民等ガ申稟ヲ筆記スル所ノ口書ニ通成レリ斯
テ後各エルサレテ故郷ニ歸ル事ヲ得タリ此漂

夕
務
簿

夕
務
者

着ノ離島則前ニ真頼ガ通航セシ小笠原島ニテ
先是彼島ニ漂着セシ者モアルベケレドモ記録
スルモノ世上ニ傳ハラザレバ知ル所由ナク
此漂流ヲ以テ旧記ニ所見ノ始トスベシ
諸島風俗山嶽ニ高麗草木ノ生る所
出立ノ地帯船中ノ起居ノ事
並ニ出立ノ時節ノ事
此等ノ事ハ今ノ世ニ
未ダ詳ク知ル所ナク

[Blank page with faint bleed-through text]



